

4 対中政策の再検討

120 昭和12年1月11日

在中国加藤(伝次郎)大使館一等書記官
より
有田外務大臣宛(電報)

日本における対中認識の不足を憂い中国の対
日猜疑解消を掲げた近衛文磨らの主張を評価
する中国紙報道振りについて

北平 1月11日後発
本省 1月11日夜着

第二〇號

十一日北京新報ハ「中日提携ト輿論」ト題シ新年ニ入ルト
共ニ日支關係ハ再ヒ各方面ノ切實ナル關心ヲ惹キ日本側ニ
於テハ既ニ二ノ卓絶セル文章發表セラレタリ即チ其ノ一ハ
六日ノ東京朝日新聞ノ社説ニシテ他ハ近衛公力最近大阪朝
日新聞ニ載セタルモノナリ前者ハ日本社會ノ有力ナル輿論
ヲ代表シ後者ハ日本政界乃至政府ノ意見ヲ代表スル重要性
アルモノニシテ其ノ所論極メテ相似シ何レモ日本ノ對支認
識ノ不足ヲ憂ヒ日本カ支那ノ猜疑ヲ解クコトヲ提携ノ先決
條件ナリト主張シ居リ日本ニ於テ斯クノ如キ日支問題ノ癥

121 昭和12年1月21日

在中国川越大使より
有田外務大臣宛(電報)

不法に作られた既成事実の撤回や外交の一元化
など日本の対中政策再検討を張群要望について

南京 1月21日後発
本省 1月21日後着

第五二號(極秘)

須磨ヨリ

二十日本官離任挨拶ノ爲往訪セルニ張群ハ左ノ通り語レリ
「西安事件後一般ニ對日抵抗ノ氣勢濃厚トナリシハ爭ハレ
サルモ目下各方面要人ノ主張ニハ大體

(一)楊虎城等ノ提唱スルカ如ク人民戰線ニ依リ支那ノ内外
政ヲ轉換セシムヘシトスルモノ

(二)内戦反對ノ旗幟ノ下ニ共產黨討伐ノ停止ヲ叫ビ結局ハ
容共ヲモ厭ハス一致日本ニ當ルヘシト爲スモノ

(三)日本トハ衝突ヲ避ケツツ支那ハ平等ノ立場ヲ恢復シ行
カントスル蔣介石及自分等ノ主張

ノ三者アル處最近一般情勢油斷ナリ難キニ鑑ミ蔣介石ハ
斷乎トシテ前記第三ノ建前ヲ強調センコトヲ決意シ十九

ヲ喝破セル言論ノ現レタルハ今後ノ兩國關係ノ發展ノ爲吾
人ノ深ク慶幸トスル所ナリ

支那人ノ猜疑トハ日本ハ

(一)條約遵守ノ信義ヲ有スルヤ否ヤ

(二)其ノ所謂親善提携ハ口頭禪ニハアラサルカ

(三)侵略飽ナキヲ知ラサルニアラサルカ

(四)浪人、毒品ヲ先鋒トシ傀儡、奸漢ヲ後盾トシ國家民族ヲ

亡サント企ムニハアラサルカ

ノ四點ニアル處吾人ハ素ヨリ其ノ誤ナルヲ望ムモノナリ兩
大民族ハ互ニ有無相補ヒ現在ニ於テハ合作シ將來ニ於テハ
共榮ヲ樂ムヘキナリ吾人ハ茲ニ友邦ノ輿論ト相呼應スルノ
意ヲ表示スルト共ニ友邦ノ輿論モ吾人ノ主張ト相呼應セラ
レンコトヲ希望ス日支間ニハ元來先天的仇恨存在セス將來
ニ於ケル兩國共同ノ福祉増進ハ現在ノ双方ノ率直ナル言論
ヨリ開始セラルヘシ云々ト論シ居レリ

支、上海大使、在支各總領事ハ轉電セリ

支ヨリ南京へ、上海大使ヨリ上海へ轉報アリタシ

日自分ニ對シ内密ニ蔣ハ依然軍事、行政兩方面ヲ采配ス
ヘキ決意ヲ傳ヘシメタル次第アリ

二、前記三主張ノ中(三)ノ蔣介石ノ立場ハ日本カ最支持シテ可
ナルモノト思考セラルル處之カ爲ニハ日本カ過去ニ於テ
不法ニ作リタル既成事實ヲ撤回シ更ニ將來ニ於テ此ノ種
策動ヲ嚴禁スヘキ旨ヲ約セラルルコト先ツ必要ニシテ此
ノ立場カ保障セラレサル限り率直ニ言ヘハ支那ハ今日日
本ト何ノ話モ爲スノ用意ナシ換言セハ元來國權恢復ニ重
點ヲ置ケル革命精神ヲ日本ニ對シ其ノ儘發揮セントスル
カ如キ考ハ毛頭ナキモ

日本ヨリ少クトモ支那ニ對シ平等ノ地歩ヲ保障セラルル
コト絕對必要ナリトノ主張最近政府及黨部内ニ一決セラ
レタル點ヲ日本ハ是非考慮セラレ對支政策ノ再檢討ヲ
切望ス

三、例ヘハ華北ニ於ケル總ユル行動ハ前記原則ニ反スル譯ニ
シテ又日本ト雖出來モセサル華北經濟合作等ヲ無理押セ
ハトテ何ノ益モナキハ日本人ト雖心アル者ハ承知ナルヘ
ク要スルニ支那ハ統一セル行政ノ完成ヲ達成セントスル
モノナレハ之ニ反スル總ユル行動ヲ停止セラルルコト必

四、日本ハ外交ノ一元化ヲ唱道セラレ居ル處外務官憲カ關東軍ニ引摺ラルルカ如キハ惡化セル一元化ニシテ又日本中央軍部カ關東軍ヲ如何トモシ得サルハ日本中央政治ノ存在ヲ疑ハシムルモノニテ是等ハ今次綏遠事件カ證明シテ餘リアレハ善化セル外交ノ一元化即チ外交ハ外務當局ノ指導ニ依ルカ如キ事態ヲ切望ス

五、以上ノ諸見地ヨリセハ日支關係ノ目前ノ推移ハ樂觀シ難ク是等ノ情勢ヲ考慮ニ入レ是非共對支政策ノ再檢討ヲ切望ストテ長時間廣田首相及閣下ニ對スル傳言ヲ述ヘタリ是等ニ付テハ然ルヘク應酬シ置キタルモ不取敢

上海大使ヨリ上海へ、厦門ヨリ福州へ轉報アリタシ

上海大使、北平、在支各總領事、滿へ轉電セリ

122

昭和12年1月22日

在中国川越大使より
有田外務大臣宛(電報)

有田外相の議會演説に關する中国紙論評について

付記 昭和十二年一月二十一日付

「第七十回帝國議會ニ於ケル有田外務大臣演説」

佛ノ如キ其ノ對蘇聯態度ヲ一變シ蘇佛提携、英蘇妥協等カ出來タ資本制度カ高度ニ發達シタ英、佛ハ既ニ赤化ノ危險ヲ恐レス其ノ過去ノ國際反共產黨戰線ノ結成計畫ヲ拋棄シタ今日ニ至リ獨リ日本ノミカ赤化防衛ノ高調スル意圖那邊ニアリヤ日本ノ眞意ハ獨逸ヲ引入レテ孤立外交ヲ打破スルト共ニ所謂日支共同防共要求ヲ妥當化セシメントスルニアツタコト明白タカ吾人ノ見解ニ依レハ日本ノ孤立原因ハ防共ニアラスシテ對支侵略ニ日本カ滿洲ヲ武力占領セサリシナラハ今日ノ如ク極東ニ不穩ノ氣漲リ日支關係尖鋭化シ英米ノ對日感情惡化スル事ハナカツタノテアル然ルニ有田外相ハ此ノ點ニハ觸レス「日滿經濟關係益々緊密ヲ増シ」ツツアルハ「殊ニ慶賀ニ堪ヘス」ト言ツテ居ルカ這ハ事ノ是非ヲ顛倒スルモ甚シキモノテ之ニ依ツテ東亞ノ安定ヲ求メントスルハ本ニ縁ツテ魚ヲ求ムルト何ソ異ナランヤ日支交渉ノ癌ハ滿洲國ノ取消ト對支侵略政策ノ改變ニアルカ日本カ自發的ニ之ヲ實行セハ支那ノ大多數ノ人民ハ之ヲ衷心ヨリ歡迎スルモノテアル之ニ反シ支那ノ統一ト復興ヲ無視スル時ハ東亞ノ和平ハ暗黒ノ深淵ニ突落サレルテアラウ有田外相ハ南京政府ヲシテ排日ヲ積極的ニ取締ラセルトカ日支

特情 上海第四號

帝國議會ノ動キニ關シテハ支那側各方面共多大ノ關心ヲ以テ注視シテ居ルガ廿二日ノ支那新聞ハ議會ニ於ケル廣田首相、有田外相ノ演説及停會顛末ヲ支那國內ノ重大問題タル西安事變以上ニ大々的且詳細ニ報道ヲ爲シタ上首相、外相ノ演説ニ付論評ヲ掲ケテ居ル右ノ内時事新報ノ外相演説左ノ如シ

時事新報

有田外相ハ日獨協定締結ノ動因トシテ第三「インターナショナル」ノ第七次大會決議ヲ口實トシ防共ノ國際的協力ノ必要ヲ力説シテ居ルカ右ハ全ク同大會ノ審議内容ヲ知ラヌモノテ同大會ニ依リ第三「インター」ハ既ニ眞正共產主義ノ立場ヲ拋棄シ一九一四年以前ノ第二「インター」ト酷似セルモノトナルニ至ツタ夫レハ大會決議案中ニ「資本主義最後ノ一點タル民主制度ヲ擁護ス」トアルヲ見レハ明瞭テ之ハ單ナル戰術ノ變更ノミテハナク實ニ原則ノ修正テアル故ニ第三「インター」ノ第七次大會以後歐洲ノ主要列強英、

國交改善ニ關聯シ具體問題テ支那ニ誠意ヲ披瀝セシメルトカ張學良ノ容共主張ヲ監視スルトカ言ツテ居ルカ斯ル枝葉末梢ニ拘泥シ根本問題ヲ等閑ニ附シテハ日支提携親善ハ實現不可能テアル日支國交ノ調整ハ一ニ懸ツテ日本朝野ノ反省ニアリ支那ノ生存ト繁榮トヲ不能ナラシメテ共存共榮ノ曙光スラ期待出來ヌ追詰メラレレハ支那モ武器ヲ執ラサルヲ得ス日支關係最後ノ段階ニアリテ如何ニシテ難局ヲ打開スヘキカ和平ノ門ハ果シテ鎖サルルヤ否ヤ

(付記)

第七十回帝國議會ニ於ケル有田外務大臣演説

(昭和十二年一月二十一日)

本日茲ニ本院ニ於テ帝國外交ノ方針及現況ニ關シ、其ノ概略ヲ陳述スルノ機會ヲ得マシタコトハ私ノ光榮トスル所デアリマス。

客年五月ノ特別議會ニ於テ申上ゲマシタ通、帝國ノ國是ハ東亞ノ安定ヲ確保シ依テ以テ世界平和ニ貢獻スルト共ニ國際正義ノ確立ニ依リ人類ノ福祉ヲ増進スルニアリマス。爾來之ガ實現ノ爲銳意努力シテ來タ次第デアリマス。

現下ノ世界情勢ヲ大觀致シマスニ、國際政局ハ依然トシテ安定ヲ缺キ、殊ニ共產「インターナショナル」即「コミンテルン」ノ活動ニ依リ益險惡トナリツツアル様ニ觀測セララルノデアリマス。此ノ秋ニ當リ我國ガ獨逸國ト客年十一月二十五日共產「インターナショナル」ニ對スル協定ヲ締結シマシタコトハ、誠ニ意義アルモノト申サナケレバナリマセン。本協定ハ我國體ト背馳シ且人類ノ本然ト相容レザル共產主義的活動ニ對スル共同防衛ヲ本旨トスルモノデアリマス。

共產運動ハ夙ニ我國ニモ侵入シ來リ、帝國政府ニ於テハ常ニ其ノ彈壓ニ力メテ參リマシタコトハ御承知ノ通デアリマスガ、支那ニ於キマシテハ、國民黨ノ容共政策以來漸次猖獗ヲ加ヘ、數年前江西、福建ノ諸地方ニハ「ソヴィエト」區ノ設立ヲ見、又所謂共匪軍ハ各地ニ跳梁シツツアツタノデアリマシテ、帝國トシテハ隣邦赤化ノ狀態ニ對シ、尠カラズ憂慮シテ居タノデアリマス。然ルニ一昨年夏「モスコ」ニ開カレマシタ第七回「コミンテルン」大會ハ、其ノ活動ノ主タル目標ヲ日本及獨逸等ニ置クベキコトヲ公然決議宣言スルト共ニ、所謂人民戰線結成ナル新戰術ヲ採用致シ、

歐洲ニ於テハ二三諸國ニ於テ右戰術ガ成功シ、特ニ西班牙ニ於キマシテハ、之ガ爲ニ内亂ノ勃發ヲ見、今尙同胞相搏ツノ悲慘事ヲ現出シテ居ルノ實狀デアリマス。他面東亞ニ於キマシテハ支那全國ニ亘ル所謂抗日人民戰線運動ニ依テ、日支關係ヲ阻害スルト共ニ、巧ニ支那ノ赤化ヲ企テ、滿洲國及我國ニ於テモ「コミンテルン」策動ノ兆候更ニ顯著トナツタノデアリマス。

此ノ事態ニ直面シ、政府トシテハ「コミンテルン」ノ巧妙且執拗ナル活動ニ對シ、從來ヨリモ一層嚴重ナル防衛措置ヲ講ジ、國體ヲ擁護シ、東亞ノ安定ニ資スルノ策ヲ立テザルヲ得ナカツタ次第デアリマス。

帝國政府ハ國內ノ機關ニ依リ、之ガ查察防衛ニ遺憾無キヲ期スルハ勿論デアリマスガ、「コミンテルン」ノ組織ハ國際的デアリマシテ、全世界ニ多數ノ支部ヲ有シ、相互ニ極メテ密接ナル聯繫ヲ保チ、本部指導ノ下ニ各國特異ノ狀況ヲ巧ニ利用致シテ居ルノデアリマスカラ、之ニ對スル防衛措置モ亦自ラ國際的協力ニ迄進マネバナナイノデアリマス。之今回獨逸トノ間ニ防共協定ヲ締結シ、情報ヲ交換シ必要ナル措置ヲ講究スルコトトナツタ所以デアリマス。

今回ノ協定ハ「コミンテルン」ニ對スル共同防衛ヲ目的トシ、此ノ目的ノ範圍内ニ於キマシテハ、何レノ國トモ進ンデ協定ヲ爲サントスルモノデアリマスガ、右目的ノ範圍外ニ亘ツテ、何等帝國政府ヲ拘束スルモノデ無イコトハ云フ迄モ無イ所デアリマス。

本協定ノ性質ニ付、誤解ヲ有シ、又危懼ノ念ヲ抱イタ向モ有ツタ様デアリマスガ、本協定ハ國體ノ擁護及東亞ノ安定ノ爲必要ニ基キマシタモノデアリマシテ、固ヨリ萬邦協和ノ精神ニ基ク各國トノ親善方針ニハ、何等變更ハ無イノデアリマス。

前議會ニ於テ申述ベマシタ通、帝國政府ハ益日滿兩國民ノ融和ヲ圖リ、兩國善隣不可分ノ關係ヲ鞏固ナラシメントスルモノデアリマシテ、之ガ爲滿洲國ニ於ケル治外法權ノ撤廢、南滿洲鐵道附屬地行政權ノ調整乃至移讓ヲ實施スル方針ノ下ニ、其ノ第一階梯トシテ客年六月十日滿洲國トノ間ニ治外法權ノ一部撤廢及滿鐵附屬地行政權ノ調整ニ關スル條約ヲ締結シタノデアリマス。然ルニ右ハ滿洲國民ニ大ナル満足ヲ以テ迎ヘラレ、其ノ實施ノ狀況亦極メテ良好デアリマス。

滿洲國ガ國內各部門ニ於テ着々健實ナル發達ヲ遂ゲツツアリ、又日滿經濟通商關係ガ益緊密ノ度ヲ増シツツアルヲ見マスコトハ慶賀ニ堪ヘヌ次第デアリマス。

帝國政府ハ曩ニ日支國交ヲ調整スルノ重要ナルヲ認メ、對支三原則ヲ提唱シテ其ノ方針ノ下ニ調整ヲ期セントシテ居ツタノデアリマスガ、昨年八月成都事件ノ發生ヲ見、引續キ北海其ノ他ニ於テ不祥事件ガ頻發シタノデアリマス。熟々此等事件ヲ考察シマス、何レモ單ナル殺傷事件デハ無く、排日政策ノ結果デアルコトガ明瞭デアリマスノデ、此等事件自體ノ解決ハ固ヨリ必要デアリマスガ、之ト共ニ其ノ根柢ニ横ハル原因ヲ除去スルニ非ザレバ、其ノ再發ヲ防ギ、我在留民ノ生命財產ノ安全ト、帝國權益ノ保護ヲ全ウシ得ズ從ツテ又日支國交ノ親善融和ヲ期待シ得ナイト認メマシタノデ、帝國政府ハ南京政府ヲシテ、進ンデ不祥事件ノ再發ヲ、其ノ源ニ於テ防止セシムル爲、事件發生ノ根本原因タル排日策動ノ取締ニ關シ、誠意實行ニ當ルコトヲ要求スル一方、國交調整ニ必要ナル諸問題ニ對スル考慮ヲ求メタルデアリマス。即チ消極的ナル排日取締ヨリ一步ヲ進メテ排日策動ノ原因タル南京政府ノ對日態度ヲ改メシムルト共

ニ、日支國交改善ニ關スル同政府ノ誠意ヲ具體の問題ニ付表示スルコトヲ慫慂シタノデアリマス。九月初旬ヨリ三ヶ月余ニ亘リ、南京ニ於テ彼我代表者ノ間ニ折衝ガ重ネラレタノデアリマスガ、支那側ノ態度ニ鑑ミ、徒ニ交渉ヲ遷延セシムルコトハ事態ヲ紛糾セシムルニ過ギズト思考致シマシテ、十二月上旬ニ至リ從來ノ話合ニ依テ双方意見ノ一致セル點ハ、南京政府ニ於テ速ニ之ヲ實行ニ移サンコトヲ要求スルト同時ニ、爾餘ノ點ハ引續キ話合ヲ進ムルコトト致シマシタ。其ノ結果成都及北海事件自體ハ十二月三十日解決ヲ見タル次第デアリマス。

唯今申上ゲマシタ通、交渉ハ未ダ所期ノ成果ヲ收ムルニ至ラズシテ目下停頓ノ狀態ニアリマスガ、今日迄ノ交渉ハ來ル可キ展開ヘノ段階トシテ大ナル意義ヲ有シテ居ルモノト信ズルノデアリマス。日本ノ支那ニ對スル根本方針ガ日支提携デアリ、共存共榮デアアルコトハ云フヲ待タナイノデアリマスカラ、努力ヲ新ニシテ更ニ調整ニ乘リ出スコトハ、兩國政府ノ義務デアルト共ニ、又兩國國民ノ希望デアルト信ズルモノデアリマス。

西安ニ於ケル異變ニ際シテ、帝國政府ハ公明正大ナル態度

北洋漁業權ノ本質及之ガ行使規定タル漁業條約ハ不斷ニ存續スベキ建前ナルコトニ付、再三先方ノ注意ヲ喚起シ、折衝致シマシタ結果、舊臘二十八日暫定取極ノ締結ヲ見、本年ノ出漁ニ支障無キコトトナツタノデアリマス。新協定ノ調印ニ關スル交渉ハ勿論之ヲ繼續シ、其ノ解決ヲ期スル次第デアリマス。

尙滿「ソ」國境劃定竝ニ紛爭處理委員會ノ設置ハ、日滿「ソ」三國間紛爭防止ニ多大ノ貢獻ヲ爲シ、三國間ノ國交調整ニ益スルコト鮮カラザルベシトノ見地ニ基キ、曩ニ我方ヨリ進ンデ提唱シタルモノデアリマスガ、之ニ關スル原則的問題ニ付キマシテハ、一、二ノ點ヲ除クノ外、意見ノ合致ヲ見タノデアリマシテ、帝國政府ニ於テハ本問題ノ成ル可ク速カニ解決セラレンコトヲ希望シテキルノデアリマス。

斯クノ如ク帝國政府ニ於キマシテハ、「ソヴィエト」聯邦トノ平和關係ヲ確立スルコトニ力ヲ致シテ居ルノデアリマスガ、之ニモ拘ハラズ「ソ」聯邦側ニ於テ滿、「ソ」國境ニ不釣合ナ軍備ヲ維持スルノミナラズ、我方ノ行動ヲ以テ侵略的ナルカニ言觸ラスコトサヘアリマスコトハ甚ダ遺憾

ト重大ナル關心ヲ以テ事態ノ推移ヲ靜觀シタノデアリマスガ、大事ニ至ラズシテ收拾サレントシツツアルハ隣邦ノ爲誠ニ慶賀スベキコトデアリマス。此ノ事件ノ當初ニ於テ、張學良ハ容共抗日ヲ標榜シタ經緯モアリ、本事件ノ始末如何ハ東亞ノ大局ヨリ見テ重大ナル影響ガアリマスカラ、帝國政府トシテハ之ガ成行ヲ注視シテキルノデアリマス。

「ソヴィエト」聯邦ニ對スル帝國ノ方針ガ正常關係ヲ維持確立スルニアルコトハ勿論デアリマス。帝國政府ハ日「ソ」間ノ諸懸案ヲ解決スルコトガ、兩國善隣ノ關係ヲ増進スル所以デアルトノ見地ヨリ昨年中漁業條約ノ修正、滿「ソ」國境劃定竝ニ紛爭處理問題等ニ付交渉ヲ進メ、傍ラ北樺太油田試掘延長問題ニ關スル我當業者代表ト「ソ」政府當局トノ間ノ交渉ヲ援助シタノデアリマス。

石油問題ハ昨年十月我當業者代表ト「ソ」政府當局トノ間ノ試掘期限五ヶ年延長ノ契約成立シ、又新漁業協定モ一年有半ニ亘ル商議ノ結果、昨年十一月中旬案文ノ確定ヲ見、將ニ調印セラレントシタノデアリマスガ、其ノ間際ニ至リ、「ソヴィエト」政府ハ國內手續未了ナリトテ調印ノ延期方ヲ申出デ、其ノ後容易ニ調印ニ應ジマセンノデ、我方ヨリ

トスル所デアリマス。

「ソヴィエト」聯邦側ニ於テ帝國ノ平和的意圖ヲ諒解シ、自己從來ノ態度ヲ反省シ、兩國間諸問題ノ解決ヲ計ルニ於テハ、日「ソ」關係ノ正常化ハ期シテ待ツベキモノアリト信ズルノデアリマス。

英國ニ對シマシテハ、日英兩國ノ傳統的關係ヲ鞏固ナラシメントスル帝國ノ方針ハ不變デアリマス。兩國ガ大局の見地ニ立ツテ、英國ハ日本ノ、又日本ハ英國ノ立場ニ付、充分同情アル考慮ヲ惜マザルニ於テハ、兩國ノ利害關係ハ、自ラ調整ノ途アルヲ疑ハナイノデアリマシテ、帝國政府ハ此ノ目的ノ爲メニ更ニ一段ノ努力ヲ致サントスルモノデアリマス。

米國トノ關係ハ最近益良好トナツテ居リマス。之ハ一方相共ニ太平洋ノ平和確保ニ寄與セント致シマスル帝國既定ノ方針ト、他方米國側ニ於テモ東亞ノ事態ニ對スル理解ガ漸次深マルニ至リマシタ結果デアルト認メラルルノデアリマスガ、此ノ友好關係ハ今後愈之ヲ増進セシムルコトヲ期シテ居ル次第デアリマス。

世界ノ三大海軍國タル日英米間ニ於テハ、海軍軍縮條約モ

昨年未限り失効スルコトナリマシタガ、帝國政府ノ不脅威不侵略ノ方針ハ不變デアリ、又我方ヨリ進ンデ建艦競争ノ意無キハ勿論デアリマス。

尙又帝國政府ノ海軍縮小ニ對スル熱意ハ、從來機會アル毎ニ表明シ來ツタ所デアリマスガ、關係諸國ニ公正妥當ナル軍縮條約ガ成ル可ク速ニ締結セラレ、世界平和ノ増進ニ貢獻スルニ至ランコトハ今尙、帝國政府ノ衷心ヨリ希望スル所デアリマス。

先般帝國政府ハ、在「エチオピア」帝國公使館ヲ廢シ、領事館ヲ設置スル旨、伊國政府ニ通告致シマシタガ、右同時ニ同國政府ハ「エチオピア」ニ於ケル帝國ノ通商上其ノ他ノ利益保護ニ對シ、好意の考量ヲ加フベキ旨言明致シマシテ、目下其ノ主旨ニ基キ協定締結ノ爲、商議ガ進メラレテ居ル次第デアリマス。右ハ帝國政府ニ於テ現實ノ事態ニ即シ、且伊國トノ親交關係ヲ考慮致シマシテ、適當ナル措置ヲ執ツタモノニ外ナラヌノデアリマス。

帝國政府ハ又、南洋方面トノ經濟關係ヲ密接ニセンコトヲ希望シテ居ルノデアリマス。此ノ希望ニ付、種々ノ中傷又ハ誤解スル向モアリマスガ、帝國政府ハ何等侵略的意圖ヲ

領印度トノ通商交渉モ、大イニ進捗シテ居ルノデアリマス。此等外交交渉ノ外、政府ハ舊市場ノ維持發展ノ爲ニハ勿論、世界各地ノ有望ナ新市場ヲ開拓センガ爲ニモ銳意各般ノ努力ヲ傾注シ我貿易一段ノ躍進ヲ期シテ居ル次第デアリマス。昨春特別議會ニ於キマシテ、國際貿易ノ障礙ト爲ルガ如キ措置ガ其ノ範圍ヲ擴大スル傾向ニアリマスコトハ我國ノ如ク原料品ノ供給ト製品ノ販路トヲ海外ニ確保スルコトニ依リ國民ノ經濟的生存ヲ維持セザルヲ得ザル國ニトリマシテハ、事態甚ダ重大ナルモノアリトノコトヲ述ベタノデアリマス。其ノ後此等ノ障礙措置緩和ノ曙光トモ認メ得ル事態ガ生ジツアル様デアリマスガ一般ニハ依然トシテ之ニ逆行スル各種ノ制限ガ存續シテ居リマス。私ハ此ノ際最も必要ナルコトハ各國ガ勢クトモ先ヅ進ンデ通商ノ自由ヲ實現スル爲「コンゴ」盆地條約ノ如キ公正ナル條約ノ精神ヲ其ノ殖民地市場ニ適用スルト云フコトデアルト信ズルノデアリマス。之ハ最近眞面目ニ取扱ハレントシツアル原料資源分配問題ノ考究實現ト竝ンデ世界ノ焦燥氣分ヲ緩和シ、平和ニ寄與スル最も有效適切ナル一方法ナリト思考スルノデアリマス。

藏スルコトナク、偏ニ平和友好關係ノ増進ニ依テ、通商ノ發展ヲ期シ、資源ノ開發ニ寄與センコトヲ希望シテ居ルノデアリマス。

我通商貿易ハ諸外國ノ採用セル各種ノ制限ニモ拘ラズ、客年ニ於テ未曾有ノ高額ニ達シテ居リマス。之ハ我國經濟及産業ノ極メテ活潑ナルコトヲ示スモノデアリマシテ、御同慶ニ堪ヘヌ所デアリマスガ、此等制限ハ専ラ外交交渉ニ依ラザレバ、打開シ得ザル性質ノモノデアリマスノデ、帝國政府ハ外交上最善ノ努力ヲ拂ヒツツアルノデアリマス。今其ノ顯著ナルモノヲ擧ゲマスレバ、帝國政府ハ濠洲ノ本邦品防遏措置ニ對抗致シマシテ、曩ニ同國ニ對シ通商擁護法ヲ發動スルノ止ムナキニ至ツタノデアリマスガ、其ノ後通商交渉ヲ開始シ、折衝數ヶ月ノ後客年末ニ至リマシテ圓滿ナル諒解ニ達シ、正常關係ニ復歸スルニ至ツタノデアリマス。蘭領印度ニ付キマシテハ、客年中帝國政府及蘭領印度政府ノ斡旋ニ依テ、蘭印側ガ通商交渉ノ前提ト主張シテ居リマシタ彼我海運業者間ノ協定ガ、成立ヲ見ルニ至リマシテ、茲ニ兩國間ニ通商商議ヲ開始シ得ルコトナリ、目下引續キ折衝ヲ繼續シ、相當進展ヲ示シテ居リマスシ、又英

最後ニ文化事業ニ付テ一言致シマス。一國ノ文化ハ其ノ國民性ノ表現デアリ、之ヲ諒解シマスコトハ根本的ニ其ノ國ヲ認識スル所以デアリマシテ、茲ニ始メテ國際正義ヲ確立シ、眞ノ國際協力ヲ實現シ得ルノデアリマス。殊ニ帝國ノ如キ古キ特殊ノ文化ヲ有スル國ニ於キマシテハ、之ヲ廣ク海外ニ宣揚シマスルコトハ、即我國家的活動ノ精神ヲ世界ニ知ラシムルノ道デアリマシテ頗ル緊要ト存ジマス。政府ハ此ノ見地ヨリ益本事業ニ努力センコトヲ期スル次第デアリマス。

以上ハ政府ノ外交方針及最近ニ於ケル外交經過ノ大要デアリマス。複雑機微ナル現下ノ内外情勢ニ於テ、帝國ノ際會スル幾多ノ困難ニ對シマシテハ、朝野共慎重ニ對處シテ苟モ誤ラザルヲ期スベキコトハ申ス迄モ無イ所デアリマスガ、國策ノ遂行ニ付キマシテハ、舉國一致充分ノ決意ヲ以テ、之ニ當ラネバナラスト信ズルノデアリマシテ、茲ニ衷心ヨリ諸君ノ御協力ヲ冀望スル次第デアリマス。

The Address of Mr. Hachiro Arata, Minister for Foreign Affairs, at the Seventieth Session of the Diet, January 21, 1937.

I have the honour today of addressing you on the foreign policy of Japan and presenting an outline of the recent developments.

As I stated in May last at the Extraordinary Session of the Diet, the national policy of Japan aims at ensuring the stability of East Asia, to contribute thereby to the cause of world peace, as well as at promoting the welfare and happiness of mankind by upholding international justice. And we have been striving earnestly and unremittingly toward the achievement of those aims.

In surveying the conditions of the world it is to be noted that the international political situation is still lacking in stability. In fact, it appears to be growing worse than ever owing especially to the activities of the Communist International, or the Comintern. In these circumstances, it is truly significant that there was concluded on November 25 last year an agreement between Japan and Germany concerning the Communist International. This agreement is intended for a common defence

against the activities of the Comintern whose tenets are not only incompatible with the national policy of our country but inconsistent with human nature itself.

The Japanese Government have always been endeavouring to suppress the Communist movement, which long since made its way also into this country. In China, subsequent to the adoption by the Kuomintang of a policy of toleration toward the Communist Party, the movement spread widely so that there were established a few years ago "Soviet Areas" in various parts of Kiangsi and Fukien, and the so-called "Communist-bandit armies" infested numerous localities. It was with grave concern that Japan watched the developments in China under the Red invasion. Then, in the summer of the year before last, the Seventh Congress of the Comintern, convened at Moscow, passed a resolution and declared openly that certain countries including Japan and Germany were to be the major objects of its future operations. At the same time the Comintern adopted new tactics of campaign based upon the formation of the so-called "people's front," which has proved successful in several

countries of Europe, especially in Spain where it has brought on a civil war which is raging even now attended with terrible scenes of fratricide. In East Asia the Comintern commenced skilfully to sovietize China while damaging the Sino-Japanese relations through a movement called "the Anti-Japanese People's Front" organized throughout that country. In Manchoukuo and also in Japan there appeared signs of the growth of Communist manoeuvres.^(manoeuvres 2)

In the face of the operations of the Comintern, tenacious as they are ingenious, our Government were obliged to devise more stringent measures of defence and formulate an adequate policy for the protection of our national polity and the preservation of the stability of East Asia. Of course, we are seeking to achieve the purpose of defence and of detection and investigation through our domestic organs. But the Comintern is an international organization with a large number of branches scattered all over the globe, which maintain close contact between one another, and conduct their campaigns under directions from headquarters, each exploiting the peculiar

conditions of its own territory. Therefore, measures for guarding against such operations should necessarily be extended to an international scale. That is why Japan has concluded with Germany the present agreement providing for the exchange of information and the study of the necessary steps to be taken.

The object of this agreement is a joint defence against the Comintern, and we should be glad to enter into agreement with any other country within the scope of that aim. Needless to say, the Japanese Government are not bound in any way outside the scope of the above-mentioned aim. It seems there have been those who entertained misunderstandings or misgivings regarding the character of the agreement. But I wish to state definitely that the conclusion of the agreement, which was dictated by the need of protecting our national polity and preserving the stability of East Asia, does not affect in the slightest degree our policy of promoting friendly relations with all Powers in the spirit of universal concord and harmony.

The Japanese Government are endeavouring to further the unity and solidarity between the peoples of Japan and

Manchoukuo and to consolidate the neighbourly and inseparable relationship between the two countries. And for that purpose, we decided, as I stated at the previous session of the Diet, upon the abolition of our extraterritorial rights and the adjustment and transfer of our administrative rights in the South Manchuria Railway Zone. Under this policy, and as the first step, there was signed on June 10 last year a treaty concerning partial abolition of our extraterritorial rights and adjustment of our administrative rights in the South Manchuria Railway Zone. The conclusion of this treaty was hailed by the people of Manchoukuo with profound satisfaction, and its operation has since proved eminently successful. It is gratifying to us all to note that Manchoukuo is making steady and healthy progress along all lines, and the economic and commercial relations between that country and ours are growing more and more intimate.

It was some time ago that the Japanese Government proposed to China three basic principles, hoping to effect thereby the much needed adjustment of Sino-Japanese relations. However, in August last there occurred the Chengtu Incident,

which was followed by a series of unfortunate incidents at Pakhoi and elsewhere. From an examination into the nature of these incidents we could see clearly that every one of them was not merely an ordinary case of murder or assault, but that they were all traceable to the anti-Japanese policy of China. While it was necessary to obtain settlements of individual cases as such, it was evident that unless we eliminated their underlying causes we could not possibly prevent the recurrence of similar incidents, nor could we protect the lives and property of our nationals and safeguard our rights and interests in China, and consequently we could never hope for a friendly and harmonious intercourse between our two nations. Therefore, in order to forestall the recurrence of any untoward incidents at their very source, the Japanese Government, while demanding utmost sincerity in the exercise of the control of all anti-Japanese agitations, invited the Nanking Government to discuss various questions, upon the solution of which depended the adjustment of Sino-Japanese relations. In other words, we desired that the Nanking Government, instead of stopping short

at the negative policy of merely controlling the anti-Japanese movement, should go a step further and alter their own attitude toward Japan, which was one of the chief causes of anti-Japanese agitations; and we urged upon that Government to prove their sincerity on various concrete issues having to do with the rehabilitation of Sino-Japanese relations. Negotiations were begun at Nanking between the representatives of the two countries early in September, and continued for over three months. Believing that, in view of the Chinese attitude, indefinite prolongation of the negotiations would only serve to bring on fresh complications, we demanded that the Nanking Government put into practice those points on which both sides had so far reached an agreement of views, leaving the remaining questions to later conversations. Thereupon the Chengtu and Pakhoi Incidents as such were settled on December 30.

As you may gather from what has been said, our negotiations with China, having failed to produce as yet the anticipated results, have come to a standstill for the present. However, I am convinced that these negotiations are of

significant value in that they will serve as a stage in the progress of the further negotiations. Since our fundamental policy toward China is directed most certainly toward the collaboration and the friendship and the common prosperity of the two countries, the renewal of the endeavours for the adjustment of Sino-Japanese relations with a fresh resolve and determination is not only an obligation of the two Governments but also a common desire, I believe, of both nations.

As regards the incident at Sian, our Government took a fair and impartial attitude and watched the course of events calmly but with grave concern. It is most fortunate for China that the affair is being brought to an end without entailing serious consequences. However, in view of the fact that Chang Hsueh-liang came out for a pro-Communist and anti-Japanese policy at the initial stage of the incident, and that its final outcome is bound to have a far-reaching effect upon the general situation of East Asia, our Government are paying careful attention to further developments.

The policy of Japan toward the U.S.S.R. lies, as a matter of

course, in the maintenance and insurance of normal relations. In order to enhance friendly relations between the two countries through the solution of pending issues, our Government have continued to conduct negotiations during the past year regarding the revision of the fishery treaty, and the problems of border demarcation and settlement of disputes between the Soviet Union and Manchoukuo, and also have assisted in the negotiations between the Soviet authorities and the representatives of Japanese interests on the matter of extension of the period of oil prospecting in North Saghalien. As regards this oil question, a contract was concluded in October extending the prospecting period by five years. The text of a new fishery convention was also drawn up in the middle of last November after deliberations lasting for one and a half years. But at the very moment when the instrument was to be signed, the Soviet Government asked for a postponement of the signature on the grounds of non-completion of the necessary domestic procedure, and thereafter persistently refused to sign. We called the attention of the Soviet Government repeatedly to the basic

nature of Japan's fishery right in the northern waters and to the perpetuity required of the treaty intended to regulate the exercise of the said right. As the result of these later conversations a provisional arrangement was concluded at last on the 28th of December, which will permit our fishery enterprise to go unobstructed for the coming session. Our Government intend of course to continue negotiations regarding the signing of the above-mentioned new convention and expect to arrive at a settlement at an early date.

The establishment of Commissions for the Manchoukuo-Soviet border demarcation and settlement of disputes was proposed by our Government in the belief that such bodies would contribute substantially toward the prevention of disputes between Japan, Manchoukuo and the Soviet Union, and the harmonization of the tripartite relations. I may say that an agreement of views has been reached on all the basic questions involved, excepting one or two points. And our Government hope to see this question settled as soon as possible.

Thus we are doing everything to establish peaceful

relations with the Soviet Union. It is to be greatly regretted, therefore, that the Soviet Union not only maintains disproportionately large armaments along the Manchoukuo frontier, but goes so far at times as to circulate rumours of aggressive actions on the part of this country. Should the Soviet Government appreciate the pacific intentions of Japan, reflect upon their own past attitude and seek to solve pending issues between the two countries, I believe that Soviet-Japanese relations would be soon put upon a normal footing.

Toward Great Britain our policy to strengthen the traditional relations remains unchanged. When the two countries, taking a broad view, give full and sympathetic consideration to each other's position, there can be no doubt that a way will be found of adjusting their interests. It is the intention of our Government to exert further efforts in that direction.

Japan's relations with the United States are of late happily improving, owing, I believe, as well to our consistent policy of continuing, in co-operation with that Power, to the maintenance of peace in the Pacific, as to a deeper under-

standing on the part of the American people regarding the situation in East Asia. The Japanese Government will continue to spare no efforts in the cultivation and improvement of the cordial relations already existing between the two nations.

The naval limitation treaty among the world's three major sea Powers, Japan, Great Britain, and the United States, has expired with the past year. Our Government, adhering as faithfully as ever to the principle of non-menace and non-aggression, have certainly no desire to initiate a race for naval construction. Indeed, we have seized every opportunity to express our sincere aspirations for naval limitation, and it is still the cherished hope of the Japanese Government that there will be concluded as soon as possible a just and fair treaty of limitation among the Powers concerned, to contribute to the cause of world peace.

Recently, we notified the Italian Government of our decision to withdraw our legation in Ethiopia and to establish a consulate in its stead. At the same time, the Italian Government assured us that they would give favourable consideration

concerning the protection of our commercial and other interests in Ethiopia. Negotiations on that basis are now in progress. I should say that we have only taken what seemed to be the proper step in view of the actual situation and also in consideration of the friendly relations between our country and Italy.

Our Government are also desirous of establishing closer economic relations with the countries in the South Seas. Although there are those who misunderstand, or even attempt to discredit our intentions, we entertain no aggressive designs, but only seek to promote our trade and join efforts with those countries in the development of the natural resources through the furtherance of peaceful and friendly relations.

I am happy to say that Japan's foreign trade, despite the numerous measures of restriction adopted by many countries, rose to an unprecedented volume last year, demonstrating the vigour and vitality of our nation's economic and industrial life. As for the trade restrictions of other lands, they are of such character that there is no way to have them removed save

through diplomatic negotiations. Our Government are doing their best in that regard. To cite a conspicuous instance, some time ago our Government were compelled to invoke the Trade Protection Law against Australia in order to counter the measures of the Australian Government to restrict the importation of Japanese goods. Thereafter we initiated trade negotiations which were continued for several months until toward the end of last year, when an amicable understanding was reached, and the relations between Japan and Australia have been restored to a normal basis.

As for the Netherlands Indies, through the intermediation of the Governments of that country and of our own, the shipping interests of the two countries concluded an agreement in the course of the past year. The conclusion of this agreement, which had been claimed by the Netherlands Indies as a postulate for any discussion on trade, paved the way to the trade negotiations between the Governments, which have been carried on with tangible results. Our trade negotiations with British India are also making satisfactory progress.

While carrying on these negotiations, our Government are also devoting their best efforts to the work of opening up new and promising markets everywhere, to say nothing of preserving and enlarging the old, so as to bring about the expansion of our foreign trade as a whole.

At the Extraordinary Session last spring I stated that the growing trend toward the extension of international trade barriers was a matter of serious concern to a country like Japan, which could not secure the nation's economic existence except through ensuring the supply of raw materials and the markets for manufactured products. Since then there have arisen certain circumstances warranting a hope for the moderation of restrictive measures. However, despite this hope, generally speaking, the various trade barriers are being kept intact as they were. What is needed most at this time, I believe, is that with a view to restoring freedom of trade, the Powers should treat their colonial markets in the spirit which marks the provisions of the Congo Basin Treaty. This, side by side with the solution of the now seriously discussed problem of the redistribution of natural

resources, should go far toward dispelling the atmosphere of universal unrest, and prove a most effective and timely contribution to the cause of world peace.

Finally, I wish to speak a few words on our international cultural work. The culture of a nation is none other than an expression of its national traits and a true appreciation of it leads to a basic understanding of that nation. The upholding of international justice and the realization of genuine co-operation among the nations of the world will only then be possible. Especially for Japan, the diffusion of her ancient and unique culture in foreign countries is of the utmost importance, since it will serve as a means to make the world understand the spirit underlying our national activities. With this point in view, our Government are intending to make further endeavours in the field of international cultural work.

Such is a brief outline of Japan's foreign policy and the progress of events in the diplomatic field. In conclusion, let me say that in the present complex and delicate circumstances, internal and external, the utmost care and caution are required of

both our people and our Government in order to surmount the difficulties that confront Japan. The whole nation should be united in the determination and share in the efforts to carry out our national policy. From my heart, I appeal to you all for your ungrudging co-operation and collaboration.

123

昭和12年1月22日
在中国加藤大使館一等書記官より
有田外務大臣宛(電報)

有田外相が議會演説において日中共同防共問題に言及しなかつた点に注目した中国紙論調について

北平 1月22日後発
本省 1月23日前着

第三七號

二十二日「ペイピン、クロニクル」ハ閣下ノ議會演説ノ全文ヲ掲ケ左ノ如キ要旨ノ論評ヲ爲シ居レリ
外相ノ演説ハ大体ニ於テ溫和ニシテ其ノ言及サレタル所モ概ネ豫想セラレタルコトノミナルカ唯或點ニ言及セス又ハ強調スルコトヲ努メテ避ケタルコトハ豫想セサリシ所ニシ

支、上海大使、在支各總領事へ轉電セリ

支ヨリ南京へ、上海大使ヨリ上海へ轉報アリタシ

124

昭和12年2月15日
在中国川越大使より
林(銑十郎)外務大臣宛(電報)

日中国交調整および三中全会に関する汪兆銘
前行政院長内話について

南京 2月15日後発
本省 2月15日夜着

第一一號

汪兆銘ハ歸國以來日本側トノ接觸ヲ避ケ居タルカ本十五日

本使トノ會談要旨左ノ通り

一、本使ヨリ日支國交調整ニ關スル意見ヲ求メタルニ汪ハ自分ハ曾テ外交ノ局ニ當リシ際モ兩國ハ共同ノ基礎ノ上ニ東亞ノ平和ヲ確保セサルヘカラストノ信念ヲ以テ相當ノ困難アリシニ拘ラス些力微力ヲ盡シタルカ今回歸國シ外交ノ責任ニハ當ラサルモ其ノ抱ク信念ハ依然トシテ變ラス兩國國交ノ改善ニハ飽迄努力スヘク假令希望ナキ場合ト雖努力スレハ希望ヲ生ミ出スニ至ルヘシト信シ居レリ

テ注目ニ値ス即チ「コミンターン」及日獨防共協定ニ關シテハ述ヘ乍ラ支那ニ於ケル共產主義ノ問題ニ何等言及スル所ナク且廣田首相ノ對支三原則ヲ支那カ日支相互了解ノ基礎トシテ受諾スヘキモノナリト言ヒ乍ラ右三原則ヲ列舉スルコトモナク曖昧ニ取扱ヒ居ルハ日本カ一旦樹立セル主義ハ遂行スヘキモ六箇月前ニ比シ之ニ固執スル程度ノ減少セルコトヲ暗示スルモノニシテ三原則ノ一タル日支共同防共カ最早適切ナラサルニ依ルモノナリ

又日支交渉ノ開始セラレタル所以及十二月末ノ成都事件解決ニ付テ述ヘ居ルモ交渉經過中既ニ了解セル事項ナリヤ否ヤニ關シ双方ノ意見對立シ交渉力難關ニ逢着セシ事實ヲ全然述フル所ナキハ交渉再開セラレ兩事件力解決セラレタルコトニ徴スルモ日本ノ對支問題ニ對スル主義ノ變更ヲ證スルモノナリ

即チ是等ハ日本カ少クトモ三原則ノ一ヲ打消トナラシムル用意アルコトヲ暗示スルモノニシテ他ノ二原則ニ付テモ同様ノコトナルヘシ斯ク日支兩國ノ眞ノ相互了解ニ對スル障礙ノ除去ハ日本ノ對支政策ノ正規ノ傾向ヲ示スモノニシテ支那ニ取リテハ眞ニ好マシキコトナリ

最近日本側ニ於テモ新ニ支那ヲ認識スヘシトノ議論モアル模様ニテ殊ニ過般新聞ニ發表セラレタル近衛公ノ談話ノ如キハ支那側識者ノ間ニ於テモ極メテ注意ヲ拂ヒ居ル狀態ニアリ大體ノ空氣ヲ觀察スルニ兩國關係打開上一曙光ヲ認メタル感モアリ若シ此ノ際兩國間ニ二、三ノ新シキ事實ヲ以テ國交改善ノ途ヲ示セハ國民ノ感情ハ翻然トシテ立直ル可能性アリト思惟セラルト答ヘタリ

二、三中全会ノ模様特ニ對外方針就中對日問題ニ付此ノ際中央ニ於テ何等カ表示アリヤト尋ネタルニ汪ハ三中全会ハ本日午前無事開會式ヲ舉ゲ引續キ豫備會議ニ於テ主席團ヲ選舉シ議事日程ヲ作成シタルカ會期ハ三日乃至五日ノ豫定ニシテ現在ノ所委員長側ヨリ進テ對外問題若クハ對日問題ヲ闡明スル豫定ナク若シ質問アレハ既定ノ方針ニ付説明ヲ與フル程度ニ過キサルヘシト答ヘタリ

三、憲政實施ニ付質問シタル處汪ハ今次ノ三中全会ニ於テハ國民大會開催問題ハ最重要ナル議題ニシテ其ノ期日モ決定ヲ見ルヘク選舉方法ニ不備ノ點アレハ之カ改正方ニ付テハ討議行ハルヘシ右國民大會ニ於テ憲法制定セラレ所謂憲政時期ニ入ルモ國民黨ハ依然トシテ最大政黨トシテ

國政ヲ執ルコトニハ變更ナク現ニ黨員ニアラサル一般國民モ非常時期ニ際シ國民黨ノ統治ニ期待スルモノ多ク國家トシテモ急激ナル政治ノ變更ハ面白カラスト思惟セラルト述ヘ共產黨ニ對シテハ右憲政時期ニ至リテモ猶彼等カ紅軍ヲ保持シ暴力ヲ以テ政權ヲ奪取セントスル「ソヴィエツト」政府ヲ組織シ階級闘争ヲ宣傳スルニ於テハ絶對ニ之ヲ容認セサル建前ニテ換言スレハ今日ノ如キ共產黨ハ之カ存在ヲ許ササル次第ナリト語レリ

最近所謂人民戰線派ノ活動ニ對シ如何ナル對策ヲ講スル次第ナリヤト問ヒタル處汪ハ共產黨カ統一戰線ヲ口號トシテ却テ國家分裂ノ策動ヲ爲シツツアルハ識者ノ矚目スル所ナルモ一般民衆ハ國難ニ迫ラレ所謂飲鴆止渴ノ境遇ニ陥ル危險アリ中央ニ於テハ之ヲ啓發シ共產黨ノ害毒ヲ知ラシムルニ努力スル積リナルモ右啓發ニハ之以上外交關係ノ惡化セサルコトヲ必要トス此ノ點日本側ノ同情ヲ得ハ幸ナリト述ヘタリ

上海大使、北平、在支各總領事ヘ轉電セリ
上海大使ヨリ上海ヘ轉報アリタシ

~~~~~

上海大使、北平、在支各總領事ヘ轉電セリ  
上海大使ヨリ上海ヘ轉報アリタシ

# (付記)

第七十回帝國議會ニ於ケル林外務大臣演說

(昭和十二年一月十五日)

第七十回帝國議會林總理大臣演說中外交ニ關スル部分

帝國ノ外交ガ國際正義ニ則リ東亞ノ安定萬邦ノ共榮ヲ具現セシムルニ在ル事ハ確固不動ノ方針デアリマス、現内閣ハ諸般ノ對外事項ノ處理ニ當リマシテ、此方針ノ下ニ朝野文武協力一致シマシテ有

效適切ナル成果ヲ收メ國際關係ヲ明朗ニ致シタイト考ヘテ居ルノデアリマス。  
引續キ外務大臣トシテ所見ヲ述ベ度イト存ジマス。政府ノ外交方針ハ只今申述ベタ通りデアリマスガ此ノ方針ノ遂行ニ當リマシテハ滿洲國トノ親善不可分ノ關係ヲ益鞏固ナラシメ對支對蘇ノ關係ヲ調整スルコトニ特ニ意ヲ用ヒントスルモノデアリマス。

125

昭和12年2月16日

在中国川越大使ヨリ  
林外務大臣宛(電報)

林外相の議會演說に關する中国紙報道振りに  
ついて

付記 昭和十二年二月十五日付

「第七十回帝國議會ニ於ケル林外務大臣演說」

南京 2月16日後發  
本省 2月16日後着

## 第一四號

十六日ノ各新聞ハ議會開會狀況並ニ兩院ニ於ケル閣下ノ外交政策應答振ニ關スル中央社電ヲ掲載シ特ニ日支兩國ハ彼我ノ立場ヲ相理解シ政府ハ勿論國民モ密接ナル接觸ヲ保チテ日支提携ヲ成功セシメ度シ日本ハ中央乃至華北侵略ノ意思ナク機會アレハ之カ誤解一掃ニ盡力スヘシ外交一元化ノ實現ニ盡力スヘシ等ノ應答内容ヲ引用シ右ハ過去ニ於ケル各外務大臣ノ答辯ト異ル所ニシテ廣田、有田兩大臣ノ主張セラレタル三原則ニ言及セサリシハ最注目ニ値スヘシト爲シ對支外交政策ノ再調整、日支關係改善ノ主張等ノ大見出ヲ附シ相當好感ヲ以テ報道シ居レリ

先ヅ支那ニ對スル關係ニ付キマシテハ帝國ト同國ト共ニ東亞ノ安定ヲ確保スルコトヲ念トシテ努力シ來ツタノデアリマスガ、支那側ニ於テハ帝國ノ眞意ヲ十分理解スルニ至ラズ兩國間ニ種々ノ問題ヲ發生シマシタコトハ甚ダ遺憾トスル所デアリマス。此ノ際兩國國民ノ感情ヲ融和シ國交關係ノ明朗化ヲ計リ互ニ手ヲ携ヘテ東亞安定ノ實現ヲ期スルコトガ肝要デアルト思フノデアリマス。之レガ爲ニハ相互ニ兩國ノ立場ノ理解ニ勉メ單ニ政府ノミナラズ特ニ民間ノ接觸ヲ繁クシ、日支提携共助ノ實績ヲ舉グルト同時ニ、苟モ之ヲ阻害セントスルモノハ進ンデ排除スルノ覺悟ヲ持シ、以テ兩國國交ノ調整ヲ圖リ度イ決心デアリマス。

次ニ「ソヴィエト」聯邦トノ關係ニ付テ一言致シマスレバ東洋平和ノ爲ニハ同聯邦ガ東亞ニ於ケル帝國ノ地位ヲ正當ニ認識シ、兩國互ニ融和ニ勉ムルノ要アルコト勿論デアリマシテ、此ノ際兩國間ニ横タハル諸懸案ノ友好的解決ヲ促進スルコトハ右目的ニ合致スルモノデアリマス。從テ私ハ「ソヴィエト」聯邦當局ニ於テモ大局の見地ニ立脚シ、右ニ協力センコトヲ要望スルモノデアリマス。  
先般獨逸政府トノ間ニ防共協定ノ成立ヲ見マシタコトハ

近時世界殊ニ東亞ニ於ケル「コミンテルン」ノ活動顯著ナルモノガアルニ顧ミ、東亞安定ノ責任ヲ有スル帝國トシテ當然執ラザルヲ得ナカツタ措置デアリ、誠ニ時宜ニ適スルモノデアリマス。政府ト致シマシテハ本協定ノ運用ヲ錯ラズ以テ之ガ十分ノ效果ヲ收メンガ爲最善ノ努力ヲ竭シタキ所存デアリマス。

帝國ノ二大友邦タル英米兩國トノ親善關係ヲ益鞏固ナラシメントスル帝國ノ方針ハ不變デアリマス。日英兩國間ニハ調整ヲ要スル諸問題ガ存スルデアリマスガ、何レモ日英親善關係ノ根本ヲ害フガ如キ性質ノモノデナク、兩國ノ相互理解ニ依リ調整セラルベキモノデアル事ヲ確信スルノデアリマス。

尙海軍軍縮問題ニ付テ帝國ハ本年ヨリ條約ノ外ニ立ツコトトナリマシタガ、不脅威不侵略ノ方針ヲ堅持スル從來ノ態度ニ何等ノ變リナキハ申ス迄モナイ所デアリマス。終リニ對外貿易ノ伸展ヲ圖ルコトハ帝國ノ發展ニ缺クベカラザル要件デアリ、特ニ現下ノ我國經濟情勢ニ徴シテ其ノ急務ナルヲ痛感スル次第デアリマス。仍テ政府ハ苟モ貿易ノ伸張ニ對スル障害ハ極力之ヲ排除スルト共ニ進ンデ貿易

purpose of ensuring stability in East Asia, the Chinese Government have yet failed to understand fully our true intentions, and there have arisen a number of problems between the two countries. I believe that it is of urgent necessity at this juncture to cultivate cordial feelings between the two nations and to improve their relationship so that they may be brought to work in close co-operation for the peace and stability of East Asia. And for this purpose we must foster mutual appreciation and bring about closer contact not only between the two Governments but also the two peoples and achieve in more concrete form co-operation and mutual assistance of the two countries. No matter what obstacles there may be, we are resolved to surmount them and to effect the adjustment of the relations between the two countries.

For the sake of the peace of the Orient it is of course necessary that the Soviet Union should correctly comprehend Japan's position in East Asia and that both the Soviet Union and Japan should seek to establish harmonious relations. To speed the negotiations on the pending issues toward an amicable

ノ促進ノ爲適切ナル施設ヲ講ゼントスルモノデアリマス。以上ノ諸方針ヲ實行スルニ當ツテハ舉國一致ノ力ニ依ラズンバ所期ノ成果ヲ擧ゲ得ナイノデアリマスカラ、茲ニ諸君ノ御協力ヲ切望スル次第デアリマス。

**The Address of Mr. Seijuro Hayashi, Minister for Foreign Affairs, at the 70th Session of the Imperial Diet, February 15, 1937.**

Now turning to our Foreign Affairs, I wish to say that the Government will pursue in the spirit of international justice a national policy, embodying the unanimous will of the nation, in order to secure the stability of East Asia and to promote the common prosperity of all nations and to brighten thereby the horizon of our international relations. To that end we will further strengthen our intimate and inseparable relations with Manchoukuo, and pay special attention to the adjustment of our relations with China and the Soviet Union.

As regards China, it is to be deeply regretted that despite our efforts in the past to act in concert with that country for the

settlement is to contribute to the accomplishment of this end. I wish therefore to urge upon the authorities of the Soviet Union to take a broad view and co-operate with us in that regard.

A short time ago our Government concluded with the German Government an agreement guarding against the menace of the Comintern. This was a timely measure as well as one of imperative necessity for Japan to take in the light of the rampant activities of the Comintern throughout the world, especially in East Asia in recent times. The Government will try not to err in the execution of the agreement but will do their utmost to secure best results therefrom.

Japan's policy of promoting friendship with Great Britain and the United States is immutable. Between the former country and ours there exist questions of various sorts requiring adjustment. But none of them is of such character as will impair the foundations of the Anglo-Japanese friendship. I firmly believe that they will be solved through mutual understanding.

As for the naval disarmament problem, Japan from this year on is not a party to any limitation treaty. However, it is

許大使に注意喚起について

付記 昭和十二年三月一日付

「堀内次官ト許大使トノ會談要領」

本省 3月4日發

第二三號

(一) 日許大使歸國(六日「エンプレス、オブ、カナダ」號ニテ横濱發ノ由)ノ挨拶旁々次官ヲ來訪セルニ付次官ヨリ大要左ノ如ク述ヘ置キタリ

イ、成都事件ニ關聯スル日支交渉ハ一時中絶ノ形トナリ居ル處兩國間ノ問題ハ兩國意見ノ最モ接近シ居ルモノヨリ解決シテ行クコト適當ナルヘク然ルトキハ困難ナル問題モ漸次解決セラルヘシ例ヘハ稅率引下問題ノ如キハ既ニ孔財政部長等モ主義上同意シ其ノ稅率ニ付專門家ヲシテ研究セシメツツアル模様ナルカ此ノ一事ニテモ解決セラルルニ於テハ其ノ他ノ問題ニモ好影響ヲ及ホスヘク殊ニ北支問題解決ノ端緒トモナルヘシロ、過般ノ三中全会ニ於テ發表セラレタル防共問題竝ニ對日態度ニ關スル國民政府ノ方針ニ付テハ日本側ニ於テモ大體諒解シ居ル處右宣言ハ表面上ノミノコトニシ

needless to say that there shall be no change in our policy of strict adherence to the principle of non-menace and non-aggression.  
Finally, one of the indispensable conditions of Japan's national development is the expansion of the foreign trade, of which the need is now particularly urgent in view of the present economic situation of our country. The Government will do everything to eliminate whatsoever obstacles against the foreign trade of Japan, and take appropriate steps to expand its volume.  
The execution of these varied programmes of our foreign policy will require the united strength of the entire nation, without which it will be impossible to obtain the desired results. I avail myself of this occasion to ask for your support and co-operation.

126

昭和十二年3月4日 佐藤(尚武)外務大臣より  
在中国(川越)大使宛(電報)

三中全会で中国政府が発表した対日態度および防共問題に関する方針につき堀内次官より

テ裏面ノ事情ハ必スシモ然ラサルカ如キ疑惑ヲ抱クモノアリ防共問題ニ付テハ我國ニ於テ最モ關心ヲ有スル次第ナルニ付貴國ニ於テ前記宣言ノ趣旨ヲ堅持セラレル様切望ス

ハ、貴國ニ於テハ現在多數ノ外國人顧問ヲ傭聘シ居ルニ拘ラス日本人顧問ノ少キハ兩國ノ意思疎通ヲ計ル上ニ於テ遺憾渺カラサルヲ以テ政治關係者ニ非サルモ差向キ技術、經濟、學術關係方面何レカニ若干顧問ヲ傭聘セララルコトトナラハ對日友好ノ「ヂェスチュアー」トナリ國交調整上好影響アルヘシト信ス此ノ點ハ今正式ニ申入ルル次第ニハ非サルモ貴大使ニ於テ御同感ナラハ獨自ノ御考トシテ當局ニ御傳ヘアリ度シ

(二) 右ニ對シ許大使ハ歸國後右趣旨ヲ以テ夫々當局ニ對シ充分ノ盡力ヲナスヘシト約シ特ニ有田前大臣トノ國交調整ニ關スル交渉カ時機未タ到來セサル爲充分ナル解決ヲ見サリシヲ甚タ遺憾トシ兩國ノ親善ニハ國民間ノ諒解ノ増進カ必要ナルカ近ク渡支スル日本實業團ハ此ノ意味ニ於テ貢獻スル所大ナルヘキヲ信スト答ヘタリ

上海大使、北平、在支各總領事、滿ニ轉電セリ

(付記)

昭和十二年三月二日 岩村成充記

堀内次官ト許大使トノ會談要領

昭和十二年三月二日午後三時許大使ハ堀内次官ヲ外務省ニ來訪シ會談セル要領左ノ如シ

大使 今回休暇ヲ得テ歸國スルコトニナリタルニ付御挨拶ニ推參セリ着任以來種々御厚意ニ預リタルコトヲ深謝ス、今後モ隨時御指教アランコトヲ請フ

次官 貴大使御着任以來貴我兩國ノ國交ニ御盡力アリタルコトヲ深謝ス、貴大使ハ學問淵博、資性溫厚、我國朝野ノ尊敬スル所ニシテ今後日支親善ノ増進ニ付貴大使ニ期待スル所多キカ故ニ御用濟ノ上ハ早く御歸任アランコトヲ希望ス、貴我兩國ノ關係ニ就テハ林總理モ屢々議會ニ於テ意見ヲ發表セラレタル通り兩國國民ノ相互理解ヲ進メ親善ヲ實現シ度キニ付貴大使御歸國ノ上ハ此ノ點ニ就テモ充分御盡力アランコトヲ望ム

大使 總理ノ演說ハ新聞等ニテ承知セルカ日支兩國ノ關係ハ兄弟ノ如ク極メテ密接ナルヲ以テ兩國力誠心誠意、互

信、互讓ノ精神ヲ以テ進メハ困難ナル問題モ解決シテ行クコトヲ得ヘシト信ス客年有田前大臣ト交渉ヲ重ネタルモ充分ナル解決ヲ見サリシハ甚タ遺憾ナルカ右ハ時機未タ到着セサルニ依ルモノナラン自分今回歸國ノ上ハ篤ト要路ニモ説明シ兩國親善ノ爲ニ努力スル積リナリ、尙兩國ノ親善ニハ國民間ノ諒解ヲ進ムルコトカ必要ニテ近ク日本實業團ノ我國ヘ渡セラルルコトモ亦此點ニ付裨益多カルヘシト信ス

次官 客年有田前大臣ハ豫テノ懸案ヲ解決セントシ居タル矢先種々ノ不祥事件起リタル爲是等ヲ一括シテ同時ニ解決セントシタルモ遂ニ交渉一先ツ中止ノ形トナリタルカ兩國間ノ問題ノ多岐ナルハ地理的ニ於テモ當然ノ事ニテ其ノ關係ノ密接ナルカ故ナリ而シテ兩國間ノ懸案ハ是非速ニ解決シテ行ク必要アルコトハ勿論ナルカ諸問題ヲ一舉ニ解決スルカ或ハ解決容易ナルモノヨリ一ツ一ツ解決シテ行クカハ其ノ時ノ事情ニ依ルモノナルヘシ今ニ於テ之ヲ見ルニ其際意見ノ最モ接近シ居レルモノヨリ解決シテ行クコトカ適當ナルヘク然ルトキハ困難ナル問題モ漸次ニ解決ヲ見ルニ至ルヘシ例ヘハ稅率引下ケ問題ノ如キ

長多年ノ努力ハ大部分共產打倒ニ在リト云フモ不可ナシ此故ニ我政府カ共產ヲ寛容スルコトナキハ當然ナルコトモ確信ス尤モ國內ニハ尙共產派アリテ策動シツツアルヲ以テ少數ノ同情者ナキニ非サルモ政府ハ決シテ聽從スルコトナカルヘシ尙過般ノ西安事變ニ徴スルモ蔣院長ノ努力ニ依リ國內統一ノ實カ益々擧カリツツアルコト及國民カ蔣院長ニ對スル信賴ノ厚キコト明瞭ニシテ蔣院長ノ對日態度、防共方針ハ確定シ居ルカ故ニ貴國ニ於テモ御安心アリテ然ルヘク且蔣院長ニ對シ十分ナル信用ヲ置キ御援助アランコトヲ希望ス

次官 今一ツ御參考迄ニ申上ケ置キタキハ顧問備聘ノコトナリ此事ハ嘗テ問題トモナリ居ルコトナルカ貴國ニハ現在多數ノ外國人顧問ヲ備聘シ居ラルルニ拘ハラス日本人顧問ナキハ兩國意思ノ疎通ヲ計ル上ニ於テ遺憾少カラサルヲ以テ政治關係者ニアラストモ差向キ技術、經濟、學問關係等何レニテモ若干ヲ備聘セラルコトナラハ對日友好ノ一「ジェスチュアー」トナリ國交調整上好影響アルヘシト信ス此點ハ今自分ヨリ正式ニ申入ルル意味ニハアラサルモ貴大使ニ於テ御同感ナラハ貴大使獨自ノ御

貴國側ニテ既ニ孔財政部長等モ主義上同意シ其稅率ニ就テモ専門者ヲシテ研究セシメラレツツアル模様此一事ニテモ先ツ解決スレハ其ノ他ノ問題ニモ好影響アルヘク殊ニ北支問題解決ノ端緒トモナルヘシ就テハ貴大使ハ是等ノ點ニ就テモ御配慮相成スカル氣運ヲ促進セラレ早ク解決スル様御盡力アランコトヲ望ム

大使 誠ニ御同感ナルニ付歸國ノ上ハ外交部、財政部關係當局ニ篤ト協議致スヘシ兩國ノ懸案モ時機到來スレハ自ラ解決速ナルヘク此ノ點ニハ充分努力スル考ナリ

次官 尙一ツ申上ケ度キハ過般ノ三中全会ニ於テ發表セラレタル對日態度竝ニ防共問題ニ關スル國民政府ノ方針ニ就テハ日本側ニ於テモ大體了解シ居レル處右宣言ハ表面上ノミノコトニテ裏面ノ事情ハ必スシモ然ラサル如キ疑惑ヲ抱ク者アリ抑モ日支ノ關係ハ只今申上クル通りナルカ防共問題ニ就テハ我國ニ於テ最モ關心ヲ有ス次第ナルニ付貴國ニ於テ前記宣言ノ主意ヲ堅持セラルルコトヲ切望スル次第ナリ

大使 ソノ事ハ自分ヨリ申上ケント思ヒタル所ナリ、我國ニ於テハ共產黨ノ審議ニ對シテ苦キ經驗ヲ嘗メ居リ蔣院

考トシテ貴國當局ヘ御提議アリテハ如何カト存スル次第ナリ

大使 御尤モナル次第ナリ最初ハ政治關係ヨリハ技術關係ノ方カ宜シカルヘク且下我國ニテハ各方面ニテ進歩セル技術者ヲ要求セルニ付此ノ點ニ付テモ篤ト協議致スヘシ次官 自分ハ前後數年間貴國ニ居リタル際蔣院長及令夫人トモ數回面識アリテ御懇話ヲ致シタルコトアリ就テハ御面會ノ際宜シク御傳言アランコトヲ望ム

大使 確カニ御傳ヘ致スヘシ

次官 王參事官ニハ當方ヘ御歸任ナキ様子ナルカ同君トモ古キ知合ナルニ付宜敷御傳言ヲ請フ

大使 委細承知致セリ、尙楊書記官ハ留學中臨時代理ヲナス筈ニ付宜敷御指導アランコトヲ望ム

次官 宜敷御願致ス

(右ニテ會談ヲ終ル時ニ午後四時四十分頃)

127

昭和12年3月6日

在中國川越大使より  
佐藤外務大臣宛(電報)

日中國交調整や中國共產黨への態度などに關

する蒋介石内話について

南京 3月6日後発  
本省 3月6日夜着

第一六八號

本使六日午前十時ヨリ約三十分間蒋介石ト會談ノ要旨左ノ通り

一、本使ヨリ西安事變ニ對スル見舞ヲ述ヘタルニ對シ蔣ハ同事變ノ際日本政府ヨリ寄セラレタル好意ニ對シ深甚ナル謝意ヲ述ヘタリ

二、次テ本使ヨリ今回外交部長ノ更迭アリタルニ付テハ昨年會談ノ際委員長ノ述ヘラレタル對日關係調整ノ趣旨ヲ新部長ニ傳達シ同部長ニ於テモ引續キ右趣旨ニ副ヒ善處スル様希望スル旨述ヘタル處蔣ハ國民政府ノ外交方針ハ一貫シ居リ部長ノ更迭ニ依リ變更セラルコトナシ尙張群ハ部長ヲ辭シタルモ更メテ中政會議祕書長ノ重職ニ就キタル次第ナルヲ以テ同人ニ對シテモ相變ラス接觸セラレ度シト答ヘタルニ依リ更ニ本使ヨリ右ハ素ヨリナルカ對外的ニハ王部長カ外交ノ責任者ナルヲ以テ昨年ノ會談ニ於ケル委員長ノ意思ハ是非之ヲ王部長ニ傳達シ日支國交

調整ニ繼續努力セシムル様手配方要求シ置ケリ

三、更ニ本使ヨリ近來共產黨ト國民政府トノ妥協ニ關スル消息新聞等ニ傳ヘラレ我方政府當局ニ於テモ極メテ注意ヲ拂ヒ居ル處國民政府ノ共產黨ニ對スル態度ニ付此ノ際委員長ヨリ明確ナル表示ヲ得ハ幸ナリト告ケタルニ

四、蔣ハ政府ノ共產黨ニ對スル態度ハ從來ト變更ナク三中全會ノ決議ニ於テモ宣明セル通りナリト答ヘ本使ヨリ最近共產黨ハ右宣明ノ條件ヲ容レ中央ニ歸順ヲ申出テタルヤノ噂アル處事實如何ト質シタルニ蔣ハ之ヲ否定シ政府トシテハ絶對ニ共產黨ノ存在ヲ認メサル方針ナル旨言明セリ

五、最後ニ蔣ヨリ近ク日本ヨリ經濟視察團來寧スル趣ナル處政府ニ於テモ充分歡迎ノ意ヲ表シ度ク自分モ是非面會ノ機ヲ得度シト述ヘタルニ本使ヨリ其ノ好意ヲ謝シ置キタリ

蔣ハ右會談中軍服ヲ着ケ顔色モ和キ居リ起坐共ニ大シテ不自由ナク豫想以上ニ元氣ノ様ニ見受ケラレ背部モ左シテ苦痛ヲ覺ヘス今後一月位靜養スレハ全快スヘシト語リ居タルカ本使ヨリ健康ノ都合ニ依リテハ本邦ニ赴キ別府

邊ノ溫泉等ニテ保養セラルレハ回復モ速カナルヘシト勸

メタルニ蔣ハ若シ機會アラハ御勸ニ副フヘシトテ其ノ好意ヲ謝シ居タリ(本會見ハ支那側トノ申合ニ依リ外部ニ對シテハ見舞ノ爲往訪セル旨簡單ニ發表スルニ止メ會談ノ内容ヲ洩ラササルコトシタルニ付右御含ヲ請フ)

上海大使ヨリ上海ヘ轉報アリタシ

上海大使、北平、在支各總領事ヘ轉電セリ

128 昭和12年3月(8)日 在中国川越大使より  
佐藤外務大臣宛(電報)

新任の王寵惠外交部長が外交方針に關する声明書發表について

南京 發  
本省 3月8日後着

特情 南京第五號

新任外交部長王寵惠ハ八日午前十時十分初登廳ヲ行ヒ正式ニ就任シタガ午後五時内外記者團ヲ外交部ニ引見就任ノ挨拶ヲ述ヘルト共ニ今後ノ外交方針ニ關シ左ノ聲明書ヲ發表シタ

近世國際關係ノ密切ナルハ遠ク昔ノ比ニアラス國際合作ヲ措イテ各國ノ繁榮ヲ圖リ世界平和ヲ確保スルコトハ出來ナイ而シテ國際合作ノ促進ニハ國民間ノ感情ヲ最注意セネハナラヌ凡テ双方ノ好感ヲ阻害スルモノハ先ツ之カ免除ニ努力或ハ奉仕スヘキテアル蓋シ國民ト國民ノ間ニ於テハ誠士ノ感情ニ依ツテ初メテ合作ノ願望ヲ生シ之カ實行ニ依テ合作ノ事實ヲ生スル國際合作ハ必ス斯ノ如キ階段ヲ經テ能ク成功スルモノテアル支那ノ對外政策ハ中央及蔣委員長カ隨時闡明シタ通り國家ノ領土ト主權ハ必ス其ノ完璧ヲ保持シ國際關係ハ必ス平等互惠ヲ以テ基礎ト爲シ此ノ原則ノ下ニ和平ノ路線ニ從テ努メテ友誼ノ増進ヲ圖ルノデアル凡ソ政治的協調、經濟的合作ハ必ス双方利益ノ原則ニ基キ相互關係ノ日ニ密接ニ赴クヲ求ムルモノテ之國際交渉ニ於テ最合理的の原則デアリ又則チ我政府決定ノ對外方針テアル自分ハ今次外交部長就任ニ當リ責任ノ重大ヲ痛感シ一ニ此ノ趣旨ニ基キ國際正義ニ依リ外交ノ常軌ニ從テ政府既定ノ政策ヲ實現シ而シテ中外關係ハ亦國際合作ニ依リ互ノ利益ノ發展ヲ獲得スヘク努力邁進スル方針テアル

129

昭和12年3月9日 在中国川越大使より  
佐藤外務大臣宛(電報)

平等な立場で対中交渉を開始するとの佐藤外  
相議會演説を画期的と高く評価する中国紙報  
道振りについて

上海 3月9日後発  
本省 3月9日夜着

第二二一號

八日貴族院ニ於ケル外相演説ハ東京中央社電ニテ詳細報道  
セラレ九日當地英漢字紙ハ何レモ重要記事面ニ之ヲ掲載シ  
居ル處大公報ハ短評ニ於テ新外相ノ演説ハ正軌ノ語ナルモ  
日本ニアリテハ蓋シ劃時代的ノ宣言ナリ吾人ハ其ノ抱負表  
示ニ敬意ヲ表スルト同時ニ支那ノ立場即チ領土主權ノ完整  
及平等互惠ノ上ニ今後ノ日支關係ヲ打ち建テルコトヲ深く  
了解サレンコトヲ希望スト述ヘ時事新報モ外相演説ハ在來  
嘗テ見サル卓見ナリト稱揚シ外相ハ平等ノ立場ニ於テ新シ  
キ出發點ヨリ交渉ヲ開始スヘシト述ヘラレタル處現在之カ  
具體的輪廓ヲ明示サレサル間ハ俄ニ樂觀シ得サルモ新シキ  
展開アルコトハ期待スルモノナリ唯今日ノ日支關係ノ行詰

更シ得サルヘシトハ思料セラルルモ佐藤外相ハ「廣田内閣  
ノ外交政策ヲ檢討シ環境ノ變遷ニ應シ必要アラハ變更ヲ加  
フヘシ」ト述ヘラレタルヲ以テ吾人ハ刮目シテ其ノ動向ヲ  
注視スヘシ云々ト論シ又九日ノ武漢日報ハ佐藤外相ハ貴族  
院ニ於ケル答辯中ニ於テ「日支問題ノ根本的解決ハ日本將  
來ノ外交ノ樞軸ヲ爲スモノナリ」ト述ヘラレタルカ其ノ根  
本的解決トハ吾人ノ言フ根本的解決ト同一ナリヤ又其ノ政  
策ヲ行フニ當リテ障礙ナキヤハ事實ニ依リテ證明セラルル  
ヲ待ツノ他ナシ最近日本カ支那ト平等ノ地位ニ立タントス  
ルハ一進歩ニシテ佐藤外相モ此ノ點ニ付述ヘラレタルカ右  
ハ支那ノ政治的進歩カ日本側輿論ノ同情ヲ得タルカ爲ニシ  
テ今後日本側カ實際ニ支那ヲ平等視スルヤ否ヤハ吾人ノ自  
信力如何ニ待ツヘキヲ以テ此ノ點國人ニ期待スル所以ナリ  
云々ト論シ居レリ

支、上海大使、北平、在支各總領事へ轉電セリ

131

昭和12年3月10日 在中国加藤大使館一等書記官より  
佐藤外務大臣宛(電報)

中国に対する優越觀念を放棄することなど佐

リハ日本ノ行動ノ多元的ナルコトニ起因スルコト多キモノ  
ナレハ此ノ弊風ヲ一掃セサレハ新外相ノ卓見モ蜚氣樓トナ  
ルコトヲ恐ルルモノナリ云々ト述ヘ居レリ

支、北平、在支各總領事へ轉電セリ

130

昭和12年3月9日 在漢口三浦總領事より  
佐藤外務大臣宛(電報)

前内閣の外交政策を必要あらば再考するとの佐  
藤外相發言を評価する中国紙報道振りについて

漢口 3月9日後発  
本省 3月9日夜着

第七五號

御就任以來當地各漢字紙ハ閣下ノ議會其ノ他ニ於ケル御言  
説ヲ詳細報道シ居レルカ七日掃蕩報ハ日本ハ曩ニ東亞ノ中  
心勢力タル地位ヲ確立センカ爲三原則ヲ提出シ林前外相ノ  
對支方針モ亦本質ニ於テ何等變化ナカリシ處佐藤外相ハ果  
シテ從來ノ武力外交ヲ改メ得ルヤ日本ノ對支外交力軍部ヲ  
中心トシ武力ヲ基礎トスル限り外相カ何人タルト其ノ主張  
カ如何ナルモノナルトヲ問ハス恐ラク大陸政策ハ些カモ變

藤外相が表明した対中基本原則を評価する中  
国紙報道振りについて

北平 3月10日後発  
本省 3月10日夜着

第九九號

八日閣下ノ貴族院ニ於ケル御演説ニ關シ十日ノ北平晨報ハ  
右要旨ハ

(一)日支交渉ノ行詰リハ速ニ打開ノ要アルコト

(二)行詰打開ノ辦法トシテハ先ツ從來ノ優越觀念ヲ拋棄シテ  
平等ノ地位ニ立ツコト

(三)支那側ノ主張ト要求ヲ充分聽取スルト共ニ日本側要求ノ  
眞意及日本ト密接ノ關係アル利益ヲ表明スルコト

(四)日本ト密接ノ關係アル利益ヲ犧牲トセス又平等ノ地位ニ  
立ツ談判ヲ恢復スルノ限度ニ於テ協調ノ精神ヲ保持スル  
コト

ノ四點ニアル處右ハ佐藤外相ノ對支政策ノ基本原則ト見ル  
ヘク又妥當ノモノト言フヘシ支那ハ積弱ノ國ナレハ久シク  
列強ノ面前ニテ壓迫威迫咄々トシテ人ニ迫ルカ如キ言論ヲ  
聞クニ慣レタルモ外相ノ所論ハ之ト異リ明智ニシテ率直之

ニ對シテ吾人ハ支那國民ノ地位ニ於テ衷心歡迎ノ意ヲ表スルモノニシテ其ノ抱負カ實際上如何ナル程度ニ發揮サレ得ルカ刮目シテ待ツモノナリ氏ノ貴族院ニ於ケル演說ノ際受ケタル歡迎振ニ徴スルモ日本ニモ亦達識ノ士アルヲ知り得ヘク交渉ノ前途ニ一道ノ曙光ヲ認メ得タル感アリ

支、上海大使、在支各總領事へ轉電セリ

支ヨリ南京へ、上海大使ヨリ上海へ轉報アリタシ

132 昭和12年3月11日 在中国川越大使より 佐藤外務大臣宛(電報)

佐藤外相議會演說や日中國交調整に關する王寵惠との意見交換について

付記 昭和十二年三月十六日發在南京大城戸(三治)

駐在武官より今井(清)參謀次長、梅津(美治郎)陸軍次官宛電報第六九号

喜多・蔣介石會談につき報告

南京 3月11日前發

本省 3月11日前着

第一八〇號

部長ノ努力ニ期待スル所多ク今回經濟視察團ノ來訪ノ如キモ貴國國民ノ感情融和ノ爲ニ好個ノ機會ト思惟スル次第ヲ述ヘタル處王ハ此ノ點ニハ充分努力ヲ拂フヘク經濟視察團ノ來訪ニ對シテハ大イニ歡迎スル所ナリト答ヘタリ

四、最後ニ日支國交ノ調整ニ關シ本使ヨリ自分一己ノ考トシテハ兩國間ニハ今日種々複雜困難ナル問題横ハリ居ルモ兩國ノ關係上兩國外交當局ハ飽迄國交ノ改善ニ努力スル必要アル處之ヲ達成スルニハ先ツ小ナル問題ヲ解決シテ漸次大ナル問題ニ入り容易ナル問題ヲ處理シテ次第第二困難ナル問題ニ移ルコト最實行シ易キ途ナリト思考スル旨告ケタルニ王ハ全然贊成ニシテ御話ノ通り相互ニ努力シ度シト答ヘタリ

以上本日ノ會談ハ各國大使ノ初會見ノ爲僅ニ約二十分ニテ終レルカ王ハ今後屢會談ノ機會ヲ得テ意見ノ交換ヲ行ヒ度キ旨述ヘ居タリ

上海大使、北平、在支各總領事、滿へ轉電セリ

上海大使ヨリ上海へ轉報アリタシ

本十日午後三時四十分王外交部長ヲ往訪會談ノ要旨左ノ通り

一、初對面ノ挨拶ノ後本使ヨリ上海大使宛電第二號ノ閣下ノ祝辭ヲ傳達シタル處王ハ深甚ノ謝意ヲ表スルト共ニ之ヲ閣下ニ御傳達方申出テタリ

二、次テ王ハ閣下ノ議會ニ於ケル演說ニ言及シ支那側一般輿論ハ極メテ好意ヲ以テ之ヲ迎ヘ日支國交ノ前途ニ新ナル途ヲ發見シ得ヘシト爲シ居レリト述ヘタルニ付本使ヨリ佐藤大臣ハ支那ニ對スル新シキ認識ヲ基礎トシテ日支國交ノ調整ニ當ラントスルノ信念ト抱負トヲ發表セラレタルモノト察セラルルカ此ノ際支那側ニ於テモ充分日本ノ國情ト日本國民生存發展ノ必要トヲ認識セラレ相互ノ理解ノ下ニ國交改善ヲ企圖スルコト肝要ナルヲ以テ部長ニ於テモ此ノ點ニ努力セラレ度キ旨述ヘタル處王ハ全然同感ナル旨答ヘタリ

三、更ニ本使ヨリ王カ八日就任ニ當リ發表セル談話ノ中ニ國民感情ノ融和ヲ以テ國際友好關係ノ基礎タラシムヘシトノ言葉アルヲ指摘シ(往電第一七一號參照)右ハ本使ニ於テモ全く同感ナルカ支那國民ノ對日感情ノ融和ニハ外交

(付記)

南京 3月16日前9時0分發  
參謀本部 3月16日後5時25分着

第六九號

喜多少將ヨリ

小官本十五日蔣介石ノ申込ニヨリ大城戸大佐ト共ニ會見其要點左ノ如シ

一、共產黨トノ妥協云々ハ虛報ナリ共產黨カ完全ニ中央ノ意志ニ屈服スレハ兎モ角ナルモ赤化根絶ノ決議案ノ條項ニ服セサルハ勿論特ニ第三「インター」トノ連絡ヲ絶タサル以上絶對ニ彼等ト妥協スルコトナシト強ク否定シ又共產匪軍ノ將來北支進出ノ懸念ニ對シテハ絶對ニ斯カル事態ヲ惹起セシメス云々

二、日支關係ニ就キテハ兩國互ニ道德ト道理ヲ以テ臨メハ國交ノ調整可能ナルヲ信ス先ツ感情ノ融和特ニ雙方人間ノ感情ノ融和ヲ必要ト考フト述ヘタリ小官ヨリ同感ナリ之カ爲ニモ我カ在支武官力受ケツツアル不快ナル取扱ヲ改ムル如ク配慮セラレ度ト希望シ彼ハ承知セリ但日本側モ特務機關ノ如キモノヲ置カサル様セラレ度シト答ヘタ

リ  
最後ニ小官ヨリ日支國交ノ調整ニハ實質上支那ノ支配者タル貴下ノ一大決意ヲ必要トスヘシト述ヘタルニ彼ハ之ヲ肯定シ且日本側ニ於テモ配慮アリ度ト答ヘ會見ヲ終レリ

尙蔣介石ハ腰部ニ微痛アル他身体ニ異狀ナシトテ頗ル元氣相ニ見エ會見四十分間終始打解ケタル態度ニテ對談セリ天、北、上、廣、漢、濟、關スミ

133 昭和12年3月27日 在中国加藤大使館一等書記官より 佐藤外務大臣宛(電報)

中国側の対日要求には一定の限度があるので  
日本側は神経過敏とならず国交調整のため華北密輸問題等解決方許世英要望について

北平 3月27日後発  
本省 3月27日夜着

第一三二號

二十六日許世英ハ往訪ノ本官ニ對シ左ノ通り内話セリ  
「日支國交調整上解決ヲ要スル問題ハ數多アルモ其ノ内最

支、上海大使、在支各總領事へ轉電セリ

支ヨリ南京へ、上海大使ヨリ上海へ轉報アリタシ

134 昭和12年4月(6)日 在中国川越大使より 佐藤外務大臣宛(電報)

互惠平等の外交關係構築を高唱した王寵惠外交演説について

上海 発  
本省 4月6日後着

特情 上海第二三號

五日ノ中央記念週間ニ於ケル外交部長王寵惠ノ外交報告演説大要左ノ如クテアル

今日支那ノ過去ノ對外態度ニ付簡單ニ申上ケル我等ハ文化ノ最古キ國家テアル世界各國ハ何レカ内テ何レカ外テモナク四海皆兄弟テアル唐ノ時代ニハ外人カ支那ニ來リ基督教ヲ傳ヘ貿易ヲ爲シタ現ニ西安ニハ大唐景教碑カ殘ツテ居リ當時ノ狀況ヲ記載スルコト甚タ詳細テアル元ノ時代テハ伊國人「マルコ・ポーロ」カ來タカ我等ハ彼ヲ中國人トシテ待遇セルノミナラス朝廷テハ彼ニ官職迄與ヘタノテアル明

モ急ヲ要スルモノハ第一ニハ北支ノ密輸問題ニシテ第二ニハ冀東察北ノ問題ナルカ其ノ一ツニテモ解決ヲ見ルトキハ直ニ日支關係全面的ニ明朗化スルトハ申兼ヌルモ支那國民ノ對日感情緩和ニ資スル所大ナルモノアルヘク支那側ノ對日要求ニモ自ラ一定ノ限度アルヘキニ付此ノ點ニ付日本側カ餘リ神経過敏ナル要ナカルヘシ

「今次兒玉以下經濟視察團ノ來支ハ國交調整上一ツノ良キ種ヲ播キタル意味ノ收穫アリタルモ如何ナル花カ咲クヤハ未定ナリ即チ上海等ニ於ケル支那側經濟界代表者トノ意見交換ニ當リ右一行ノ經濟提携ノ主張ニ對シ支那側ハ政治問題先決ヲ主張シ稍太平洋會議ノ兩國代表ノ討論ニ彷彿タル嫌アリタル由ナルカ斯クテハ折角ノ企モ多クノ期待ヲ懸ケ得ラレサル次第ナリ尤モ率直ニ申セハ支那側トシテハ既ニ提携ヲ論スル以上感情上ノ障礙ヲ排除クノ要アル點即チ政治問題ノ解決ヲ主張セルモノト認メラレ之ヲ以テ支那側ニ誠意ナシト斷スルハ不可ナリ

「自分ノ東京出發ニ當リ林總理ト會談ノ際總理ヨリ日支文化提携ニ關スル御話アリタルカ學界人士ノ相互派遣學術交換ハ親善増進上極メテ望マシキコトト考ヘ居レリ云々

朝ニ至ルヤ外人ノ我國ニ來ル者更ニ多ク當時ノ尙書徐光啓ノ著作中ニハ外人ノ往來カ詳シク記サレテ居ル斯ノ如ク我國歷代ノ外交態度ハ非常ニ寛大デアツタ滿洲ニ發祥シタ清朝カ長城ヲ越エテ來テ以來對外態度漸ク變リ外國人ヲ輕視侮蔑スルニ至ツタ而シテ阿片戰爭後此ノ侮蔑ハ恐怖トナリ外交ヲ處理スル當局ハ何レモ畏懼ノ心ヲ抱クニ至ツタ外國人ハ次第ニ我國ヲ侵略スルニ至リ支那ハ次第ニ衰弱ノ國トナツタ外人ヲ輕視スルハ間違テアルカ自ラヲ菲薄トスルノハ更ニ間違テアル故ニ孫總理ハ平等互惠ノ原則ヲ以テ各國ト共ニ進歩發展センコトヲ唱導サレタ總理ハ曾ツテ言ハレタ「二國カ相隣スルノハ丁度二人ノ人カ居ル様ナモノタ」ト二人ノ間ニ己ヲ損シテ人ヲ益スルモノト人ヲ損セスシテ己ヲ益スルモノト二人カアル時其ノ後者ヲ選フノカ外交テアリ平等互惠ノ精義テアル近來國際上ノ「經濟提携」「經濟合作」ノ聲頗ル高イモノカアル所謂經濟提携ハ双方的ノモノテアル一方丈ケノ手足ヲ縛ル提携ハ提携トハ言ヘナイ所謂合作ハ双方聯合シテ立ツモノト一人テハ合作トハ言ヘヌ自分ノ事ハカリ考ヘルノハ合作テハナク獨作タ我等ノ外交主張ハ中央カ幾度モ宣言シテ明カナル如ク平等互惠ノ原則

ノ下ニ誠心誠意世界各國ノ國際關係ヲ増進セントスルニア  
ル一國家カ國際地位ヲ高クセントスルニハ堅決奮闘スルニ  
アラサレハ不可テアル吾々ハ國ヲ立テルノ決心アリ國防ヲ  
固ムレハ必ス總理カ吾々ニ望ム懸ケタ自由平等ノ地位ヲ得  
ル日カ來ルテアラウ

135 昭和12年4月17日 在中国川越大使より  
佐藤外務大臣宛(電報)

日本の対中新認識論および国民政府の中国共  
産党に対する方針などに関し汪兆銘と意見交  
換について

南京 4月17日後発  
本省 4月17日夜着

## 第二七八號

<sup>(1)</sup> 本使十七日汪兆銘ト會談ノ要旨左ノ通

「本使ヨリ歸朝ノ挨拶ヲ述ヘ政府ニ報告ノ参考上何等承リ  
置クコトナキヤト尋ネタル處汪ハ實ハ最近支那ノ統一及  
建設ノ進歩ヲ稱揚スルモノ鮮カラス殊ニ日本側ニ於テ所  
謂對支新認識論<sup>(論義)</sup>盛ントナリタル爲自分ハ密ニ支那國民カ

想ニ向テ進マントノ意味ナリト辯明セリ

「其次テ本使ヨリ共產軍ノ現狀殊ニ國民政府カ之ニ對シ最近  
採リツツアル態度方針ニ付外間種々ノ臆測アリ真相不明  
ナルカ右ハ日本政府ニ於テ極メテ注意シツツアル問題ナ  
ルニ付説明ヲ願度シト述ヘタル處汪ハ國民政府ノ對共產  
黨方針ハ三中全会前後ヲ通シ一貫シ居リ何等變更ナキ次  
第ナルカ最近ノ政府對共產軍ノ關係ヲ極秘ノ御含ニテ御  
話スヘシト前提シ

「實ハ三中全会當時共產黨ヨリ「ラヂオ」ヲ以テ政府ニ對  
シ(一)中華「ソビエツト」政府ヲ解消シ現共產軍占據地帶  
ヲ中華民國特區ト爲シ特區政府ヲ設クルコト(二)共產軍ヲ  
軍事委員會ノ指揮下ニ置キ國民革命軍ト改稱スルコト(三)  
以上二項ヲ承認スルニ於テハ共產主義ノ宣傳ヲ停止スヘ  
キ旨ヲ提議シ來リタルカ政府トシテハ第一點ハ領土行政  
ノ完整上到底承認シ難ク第二點ハ叛軍カ降服セル際政府  
ノ自由意思ニテ改編スルハ兎モ角之ヲ其ノ儘收容スルコ  
トハ絕對ニ認メ難ク又第三點ノ共產主義宣傳ハ嚴重取締  
リ居ル所ニシテ更メテ停止云々ヲ論議スル必要ナキ次第  
ナルヲ以テ三中全会ニ於テモ例ノ赤化根絶決議案ニ依リ

遽カニ驕慢トナリ折角ノ努力カ弛緩スルニ至ルナキヤヲ  
憂ヘ又佐藤大臣カ議會ニ於テ對支外交ノ基調ヲ表明セル  
ニ對シ支那國民カ之ニ付ケ上リ反響ノ態度ニ出テ却テ事  
態ヲ惡化スルコトナキヤヲ惧レ各地旅行ノ際ニモ此ノ點  
ヲ注意シテ觀察シタル處幸ニシテ各地軍政當局者等ハ何  
レモ支那統一及建設ノ事業猶半ハニシテ今後益々努力セ  
サルヘカヲササル必要ヲ痛感シ居リ又佐藤大臣ニ依リ表明  
セラレタル日本側ノ態度ニ對シテハ支那トシテモ之ニ對  
シテ適當ノ態度ヲ採ラサルヘカラストノ議論識者ノ間ニ  
起リ居リ自分モ安心シタル次第ナルカ右ノ如キ實情ハ日  
本政府ニモ御報告願ヒ度シト語リタリ

<sup>(2)</sup> 汪ハ更ニ過般經濟觀察團來訪ノ際周作民等支那側代表者  
ヨリ日支經濟提携ハ政治問題ノ解決ヲ前提トスヘキ旨意  
見ヲ開陳シタル爲其ノ後之ニ付テ種々議論ヲ生シ居ル模  
樣ナルカ右政治的障礙除去ノ要望ハ最少限度ノモノニシ  
テ決シテ一時的ニ總テノ問題ヲ解決スヘシト言フカ如キ  
理想ヲ言ヒ居ルニアラス又政治問題ノ解決ナクハ經濟  
提携ハ絕對ニ不可能ナリト固執シ居ルモノニモアラス要  
ハ政治問題、經濟問題ヲ並行シテ一步一步解決シ漸次理

右方針ヲ宣言セル次第ナリ其ノ後共產軍ト中央軍トノ間  
ニハ時々衝突モアリ又種々折衝モ行ハレ居ルコトハ事實  
ナルモ未タ全部解決スルニ至ラス自分ノ得居ル情報ニ依  
レハ共產黨内部ニ於テモ轉向ヲスル者ト然ラサル者トニ  
分レ意見一致シ居ラサル模様ナリ何レニスルモ政府トシ  
テハ彼等カ自新ノ途ニ出テ之ヲ事實ニ證明スル者ニ對シ  
テハ之ヲ許スヘキモ然ラサル限り絕對ニ其ノ存續ヲ許サ  
サル方針ヲ堅持シ又彼等カ轉向セリト稱シテ再ヒ策動ス  
ル危險ニ對シテハ民國十三年來ノ經驗モアリ嚴重監視ス  
ヘキコト勿論ナリ

<sup>(4)</sup> 即チ政府ハ眞ニ悔悟シ轉向スル共產黨員ハ之ヲ赦免スル  
方針ナルモ所謂容共政策ハ絕對ニ執ラサル所ニシテ過日  
太原ニ於ケル講演ノ際モ自分ハ此ノ旨明白ニ述ヘ置キタ  
リ尙目下共產軍ノ實勢力ハ三萬乃至四萬ニシテ事實上左  
シテ問題視スルニ足ラス若シ西安事變ナカリセハ夙ニ消  
滅シタルモノナリト述ヘタリ

四、依テ本使ヨリ共產黨カ斯ル方向轉換ヲ爲スニ至リタルハ  
「コミンテルン」ノ指令ニ基クモノニアラスヤト質シタ  
ルニ汪ハ其ノ點的確ニ判明セサルモ最近蘇聯ノ「スター

第二八〇號

本使十九日王寵惠ト會見大要左ノ通り談話セリ

一、本使ヨリ歸朝ノ挨拶ヲ述ヘタル處王ハ十八日ノ東京朝日ニ掲載セラレタル貴大使ノ對支政策建議案ナルモノハ事實ナリヤト問ヒタルニ付本使ヨリ右ハ當地朝日通信員カ其ノ憶測ヲ以テ打電セルモノナリト告ケタリ

二、次テ本使ヨリ佐藤大臣ニ對シ何等傳言等アリヤト尋ネタルニ王ハ佐藤大臣ノ日支國交調整ニ對スル努力ヲ感謝スルト共ニ佐藤大臣カ議會ニ於テ聲明セラレタル對支政策ノ信念ト抱負トヲ貫徹シ之ヲ具體的ニ實現セラルルコトヲ期待シ居ル旨大臣ニ傳言アリ度シト述ヘタリ

三、依テ本使ヨリ國交調整ノ具體化ニ付テ何等腹案ニテモアル次第ナリヤト質シタル處王ハ全ク個人的意見ナルカ政治問題ト經濟合作問題トハ其ノ何レカ一方ノミヲ固執スルコトナク兩者併セテ同時ニ研究ヲ進メ其ノ解決ヲ圖ルコト國交調整上最有效ナリト思惟シ居レリト答ヘタルニ付更ニ本使ヨリ政治問題ト言フハ具體的ニ如何ナル問題

南京 4月19日後發  
本省 4月19日夜着

リン」一派ハ從來ノ「コミンテルン」ノ世界革命政策ヲ修正シ各國トノ平和關係樹立ヲ目標トシテ其ノ對外政策ヲ行ハントシツツアリトノコトナルヲ以テ右政策モ多少影響シ居ルニアラスヤト思惟セラルルト答ヘタルニ付本使ヨリ中國共產黨ト「コミンテルン」トノ關係ヲ問ヒタル處汪ハ國民政府ニ於テモ此ノ點ヲ重視シ從來極力經費及武器ノ援助並ニ通信聯絡ノ有無ヲ調査シ居ル次第ナルカ未タ確實ナル證據ヲ握リ得ス尙政府トシテハ右聯絡ヲ防止スル爲蘇聯方面トノ交通ヲ嚴重監視シ居ル爲事實上大シタ關係ハ着ケ得サル實狀ナリト答ヘタリ

最後ニ本使ヨリ最近日本ニ於テハ對支認識論高調セラレ殆ト常識化セル實情ナルカ此ノ際支那側ニ於テモ日本ニ對スル認識ヲ深ムル必要アリ即チ日本國民ノ生存並ニ發展ニ關シ其ノ表現ノ方法態度等カ時ニ巧ミナラサル爲動モスレハ支那側ヨリ帝國主義又ハ侵略主義ノ如ク誤解セラレ居ル模様ナルモ斯ル表面上ノ事象ニ捉ハレス大局ヨリ日本民族生存及成長ト謂フコトモ充分認識スルコト兩國國交調整ノ根本義ナリト力説シタル處汪ハ右ハ全然同感ナルカ唯其ノ方法ニ付支那國民ハ日本側ノ善處ヲ要望

最後ニ本使ヨリ最近日本ニ於テハ對支認識論高調セラレ殆ト常識化セル實情ナルカ此ノ際支那側ニ於テモ日本ニ對スル認識ヲ深ムル必要アリ即チ日本國民ノ生存並ニ發展ニ關シ其ノ表現ノ方法態度等カ時ニ巧ミナラサル爲動モスレハ支那側ヨリ帝國主義又ハ侵略主義ノ如ク誤解セラレ居ル模様ナルモ斯ル表面上ノ事象ニ捉ハレス大局ヨリ日本民族生存及成長ト謂フコトモ充分認識スルコト兩國國交調整ノ根本義ナリト力説シタル處汪ハ右ハ全然同感ナルカ唯其ノ方法ニ付支那國民ハ日本側ノ善處ヲ要望

シ兩國共自己ノ利益ノ爲他ヲ害セサル所謂共存共榮ノ途ニ進マンコトヲ望ミ居ル次第ニテ國民政府ハ素ヨリ支那ノ進歩發達カ日本トノ對立ヲ來ササル方向ヲ執ル様國民ヲ指導スル方針ナリト答ヘタルニ付更ニ本使個人ノ意見トシテ機會アラハ貴下自ラ日本ニ赴キ朝野ノ人士ト意見ヲ交換シ意思ノ疏通ヲ圖ラルレハ國交上裨益スル所大ナルヘシト告ケタルニ汪ハ自分モ機會アラハ一度渡日シ度キ希望ナルカ政府部内ノ有力者等モ屢日本視察ニ赴クコト然ルヘキ旨常ニ勸メ居ル次第ナリ更ニ從來兩國間ニハ經濟界人士ノ往來モ比較的多キモ文化方面ノ交渉ハ少ナキヲ以テ今後ハ此ノ方面ニモ努力スル必要アルヘシト述ヘタリ

北平、在支各總領事へ轉電セリ

136 昭和12年4月19日

在中国川越大使より  
佐藤外務大臣宛(電報)

日中國交調整に当たっては政治問題と經濟合作を併せて研究・解決すべき旨王寵惠内話について

ヲ指ス次第ナリヤト問ヒタルニ

王ハ未タ何等準備シ居ル譯ニアラス先ツ兩國間ニ於テ非公式ニ意見ヲ交換シ漸次之ヲ纏メテ正式ノ協議ニ移スコトトセハ解決ノ途ヲ發見シ得ヘク結局日本側ニ於テ大シタ利益ナク而モ支那ニ對シテハ大ナル損害ヲ與ヘツツアル問題ヲ解決セラルルコトヲ希望スルモノナリ斯シテ日本側ヨリ寄セラレタル好意ニ對シテハ支那側ハ之ニ倍スル好意ヲ以テ報ユル用意アリト答ヘタリ

四、本使ヨリ最近蘇聯トノ間ニ通商條約ノ締結ノ商議等開始セラレタル次第ナリヤト問ヒタルニ王ハ通商條約締結ノ協議ハ兩國輸出入商品ノ標準數量ニ付意見對立ヲ見テ交渉停頓ノ儘今日ニ至リタル次第ナルカ蘇聯大使モ歸任早々ニテ現在右商議ヲ開始シ居ラスト答ヘタリ

五、尙右會談中王ハ再ヒ經濟視察團ニ言及シ同團歸國後兒玉團長ヨリ政府ニ對シ何等提案アリタリヤト尋ネタルカ本使ハ本件ニ付テハ別段報告ニ接セス詳細ヲ知悉セスト答ヘ置キタリ

北平、在支各總領事へ轉電セリ

137

昭和12年5月11日  
佐藤外務大臣より  
在中国日高(信六郎)臨時代理大使、在  
滿州國植田大使、在天津堀内(干城)總  
領事他宛(電報)

「對支實行策」の伝達方法について

付記一 昭和十二年四月十六日、外務・大藏・陸軍・

海軍四大臣決定

「對支實行策」

二 昭和十二年五月十七日付

「地方長官會議ニ於ケル佐藤外務大臣訓示」

本省 5月11日後7時0分発

合第二八九號(極秘)

今般四月十六日附ヲ以テ外務、大藏、陸海軍四大臣間ニ對  
支實行策及北支指導方策ノ決定ヲ見タル處(委細ハ森島參  
事官ニ托送ノ亞一機密合第六五三號及合第六五五號ニ依リ  
御承知相成度シ)右方針ノ傳達竝ニ説明ハ左記ニ依ルコト  
トセルニ就テハ右御含ノ上可然ク御措置相成度シ

記

(1)上海、南京及漢口竝ニ北支方面ニ對シテハ森島參事官ヲ  
シテ北平ニ赴任ノ途傳達セシム。

家口、滿、福州、廈門、廣東、香港ニ轉電セリ

(付記一)

對支實行策

(昭和十二年四月十六日外務、  
大藏、陸軍、海軍四大臣決定)

昭和十一年八月七日決定ノ「帝國外交方針」ニ遵據シ且昭  
和十一年八月十一日關係諸省間決定對支實行策ノ實績ト支  
那國內情勢ノ趨向トニ鑑ミ對支政策ニ關シ差當リ採ル可キ  
施策左ノ通

一、南京政權ニ對スル施策

南京政權竝ニ同政權ノ指導スル支那統一運動ニ對シテハ  
公正ナル態度ヲ以テ之ニ臨ムト共ニ支那側力侮日的態度  
ヲ採ルニ至リシ根因ノ除去ニ努メ以テ同政權ヲシテ漸次  
容共及歐米依存的政策ヲ拋棄シ帝國ト近接シ來ルカ如ク  
具體的ニ促進ヲ計リ特ニ北支ニ於テハ自ラ進ムテ日滿支  
提携共助ニ關スル諸施設ノ實現ニ協力セシムル様指導ス  
ルモノトス。

南京政權ニ對スル施策ニ當リテハ同政權ノ面子ヲ考慮シ  
同政權ヲシテ國民ノ手前抗日標榜ノ已ムナキニ至ラシム

森島參事官ハ秩父丸ニテ十六日神戸發上海(十八日着)南  
京(二十日着)天津(二十二日南京ヨリ飛行機ニテ着)經由  
二十五日北平ニ着任ノ豫定(在漢口三浦總領事ハ森島參  
事官ノ上海滯在中全地ニ出張セラレ度シ)

(2)北平、張家口、濟南及青島ノ各公館長ハ二十一日迄ニ天  
津ニ出張セラレ度シ

(3)在滿大使館ニ對スル傳達ハ森島參事官北平着任後成ルヘ  
ク速ナル機會ニ(目下ノ處二十九日新京着ノ豫定)同參事  
官ヲシテ之ヲ行ハシム

(4)追テ川越大使歸任ノ上、上海ニ關係總領事會議召集ノ豫  
定ナルニ就テハ南支方面ニ對スル傳達ハ右ノ機會ニ讓ル  
(森島參事官ニ托送ノ公信ハ確實ナル便ニ依リ上海ヨリ  
夫々福州、廈門、廣東、香港宛送付シ置カレ度シ)

(5)尙陸海軍側ニ於テハ柴山軍務課長(十六日長崎丸ニテ上  
海着、以後大体森島參事官ト同様ノ日程ニテ南京、天津  
北平、新京ニ出張ノ豫定)及軍務局第一課藤井少佐(十二  
日上海着、青島及天津ヲ經テ歸國ノ豫定)ヲシテ新方針  
ヲ夫々出先ニ徹底セシムルコトトナリ居レリ。

本電宛先 支、北平、上海、漢口、天津、濟南、青島、張

ルカ如キ措置ヲ避クルト共ニ特ニ支那民衆ヲ對象トシ如  
實ニ共存共榮ヲ具現スルカ如キ文化的經濟的工作ニ力ヲ  
注キ以テ日支兩國國交ノ調整ニ資ス。

尙客年南京ニ於テ行ハレタル日支交渉ノ經緯ヲ辿リ且ハ  
其ノ後ニ於ケル支那政局ノ動向ヲモ考慮ニ容レタル上成  
ルヘク速ナル機會ニ左記諸懸案ノ解決ヲ期ス。

(一)排日言動ノ取締

(二)邦人顧問ノ招聘

(三)上海福岡間航空連絡ノ開始

(四)關稅ノ引下

(五)不逞鮮人ノ逮捕引渡

(六)上海其ノ他ニ於ケル不祥事件ノ解決

ニ對北支施策

對北支施策ノ主眼ハ該地域ヲシテ實質的ニ防共親日滿ノ  
地帶タラシメ併セテ國防資源ノ獲得竝ニ交通施設ノ擴充  
ニ資シ一ハ以テ赤化勢力ノ脅威ニ備ヘ他ハ以テ日滿支三  
國提携共助實現ノ基礎タラシムルニ在リ。

右目的ノ達成ハ主トシテ經濟諸工作ノ促進ニ依ルコトト  
シ北支ノ分治ヲ圖リ若クハ支那ノ內政ヲ紊ス虞アルカ如

キ政治工作ハ之ヲ行ハス以テ内外ノ疑惑竝ニ支那ノ對日不安感ノ解消ニ努ムルト共ニ支那側ヲシテ進ムテ經濟資源ノ開發、交通ノ發達、文化的關係ノ向上等ニ協力セシムル如ク指導スルモノトス。

### 三 其ノ他ノ地方政權ニ對スル施策

地方政權ニ對スル施策ハ此等局地的政權トノ實質的提携ヲ圖リ以テ我方權益ノ伸張ヲ期スルト共ニ右ニ依リ支那全般ニ於ケル綜合的親日傾向ヲ醸成セシムルヲ以テ主タル目的トス。從ツテ特ニ統一ヲ助長シ又ハ分立ヲ計ル目的ヲ以テ地方政權ヲ援助スルカ如キ政策ハ之ヲ執ラサルモノトス。

### 四 對内蒙施策

蒙古人心ノ把握ヲ以テ對内蒙政策ノ主眼トス。然シテ之カ施策ニ當リテハ親日滿ヲ基調トスル蒙古人ノ蒙古建設ヲ指導シ對蘇態勢ヲ調整スルヲ以テ窮極ノ目的トスルモ差當リ錫盟及察盟ヲ範域トスル内蒙政權ノ内部強化ニ專念スルモノトス。尙右工作ハ内面的ニ之ヲ行フト共ニ支那側トノ紛爭ハ爲シ得ル限り平和的方法ニ依リ處理シ以テ對蘇及對支政策トノ協調ニ留意スルモノトス。

御承知ノ通り近來支那ニ於キマシテハ、國家意識ノ擡頭ニ伴ヒ、一致抗日ト云フ主張カ一種ノ流行語トナリタル感アリ、西南政權ノ如キ反蔣ノ旗ヲ舉クル者モ抗日ヲ標榜シ、最近ノ西安事件ニ於キマシテモ、張學良ハ對日即時開戰等ヲ通電シタ様ナ有様テ、抗日ハ支那内政上爲ニスル者ニ依リ利用セラレルコトカ尠クナイノテアリマスカ、一方南京政府ニ於キマシテモ、此ノ支那民衆ノ國家主義的運動ヲ利用シ外敵ニ當ル爲ニハ内爭ヲ止メヨト唱ヘツツ、自己政權ノ基礎強化ニ努メテ居ル次第アリマシテ、地方政權ノ中央化、幣制改革ニ依ル財政ノ建直シ、外國資本ニ依ル各種建設の事業ノ促進等國民政府ニ於テ支那統一ノ方向ニ歩ヲ進メテ居ルコトハ、西南問題ノ解決、綏遠事件、西安事件ノ經緯等ニ徴スルモ見逃シ難キ一ツノ事象ト言ハサルヲ得ナイノテアリマス。

繙ツテ考ヘマスルニ、支那ニ於ケル抗日的空氣ハ帝國カ支那ニ對シ侵略的意圖ヲ有スルモノテアルト云フ様ナ誤解ヨリ發生シテ居ル點モ尠クナイト思ハレルノテアリマスカ、帝國政府トシテハ左様ナ考ハ全然ナイノテアリマシテ、政府ハ此ノ上トモ其ノ眞意ヲ支那側ニ十分徹底セシメ、日支

### (付記二)

地方長官會議ニ於ケル佐藤外務大臣訓示

(五月十七日)

本日地方長官會議ニ於キマシテ最近ノ帝國ノ外交關係ニ付聊カ所見ヲ述ヘ併セテ諸君ニ對スル本大臣ノ希望ヲ開陳スル機會ヲ得マスルコトハ私ノ欣快トスル所テアリマス。

帝國政府ノ根本外交方針カ、國際正義ニ則リ東亞ノ安定、萬邦ノ共榮ヲ具現セントスル帝國ノ國是ニ遵由シテ舉國一致ノ外交政策ヲ遂行シ國際關係ヲ調整シ國運ノ伸暢ヲ計ラムトスルニアルコトハ、諸君モ御承知ノ通りテアリマス。

世界ノ情勢カ依然トシテ不安ナル秋ニ當リ此ノ間ニ處シテ帝國ノ國際的地位ヲ改善シ向上セシメムカ爲ニハ國際ノ全局ニ統合的の考覈ヲ加ヘ特ニ日滿兩國ノ不可分關係ヲ愈々鞏固ナラシメ、對支對「ソ」關係ノ調整ヲ計ルコトカ肝要ナルト信スルノテアリマス。

然ルニ日支ノ關係ハ遺憾乍ラ客年來不祥事件カ續發シ日支國交ノ改善ニ必要ナル諸懸案ノ解決モ、渺々シカラサル狀態ニ在ルノテアリマス。

國交ノ改善ニ努力センコトヲ期シテ居ル次第テアリマス。

尙前記支那側ノ形勢ニモ鑑ミ、今後ノ方策トシテハ先ツ民間ノ接觸ヲ頻繁ナラシムルコトニ依リ、兩國國民間ノ感情ノ融和ヲ計ルト共ニ、日支提携ヲ主眼トスル文化的、經濟的工作ヲ促進セシメ、日支大衆ヲ基礎トスル兩國ノ緊密ナル經濟的相互依存關係ヲ樹立スルコトニ依リ、漸次兩國國交ノ調整ヲ圖リ度イト考ヘテ居ルノテアリマス。

「ソ」聯邦ハ近來所謂第二次五年計畫ニ依リ輕工業ノ發達ニ力ヲ注イテ居ツタノテアリマスカ、明年ヨリハ更ニ所謂第三次五年計畫ニ依リ、工業ノ繼續的發展ト國民文化ノ向上ニ重點ヲ置キ、益々國民經濟力ノ充實ヲ計リ、之ト併行シテ軍備ノ增強ニ努メテ居リマス。

帝國ニトリ重要ナル關係ヲ有スル極東「ソ」領ニ於ケル狀況ヲ見マスト益々以テ同方面ニ於ケル軍備ノ充實、各種軍需工業ノ建設ニ日モ足ラサルノ概カアルノテアリマス。他面「ソ」聯邦政府ハ昨年十二月新憲法ヲ制定シ、所謂民主的諸制度ヲ布クニ至リマシタカ、昨年八月及本年一月ノ所謂反革命陰謀裁判事件等ニ徴スルモ、「ソ」聯ノ内政ハ相當複雜ナルモノカアル様ニ看取セラルルノテアリマス。

帝國政府トシテハ兩國間ノ不必要ノ摩擦ヲ出來得ル限り除去スルト共ニ、兩國間ニ懸案トシテ存スル漁業條約問題、北樺太利權關係問題、滿「ソ」國境委員會問題等ノ重要問題ノ解決ヲ計リ、以テ兩國ノ關係ヲ正常化セント努力致シテ居ル次第アリマス。

近時本邦ニ在ル「ソ」聯公館員、「ソ」聯船舶等ノ取扱振ニ付苦情又ハ事故力時々起ルト共ニ、「ソ」聯邦側ニ於テモ我公館員在留邦人、我船舶等ノ取扱振ニ付面白カラサル事件カ頻發シ、兩國ノ間ニ不必要ノ摩擦ヲ生シテ居ルノテアリマス。之ハ兩國國交改善ノ爲遺憾ナコトデアリマスカラ、今後ハ斯ル事態カ發生セサル様、「ソ」聯側ニモ反省ヲ促シテ居ル次第デアリマスカ、我方ニ於テモ取扱方ニ注意ヲ拂フ様特ニ諸君ノ御配慮ヲ希望スル次第デアリマス。

次ニ、日英ノ親善確保ハ我諸般ノ對外關係上、極メテ望マシキ所デアリマスカ、今尙兩國間ニハ支那問題、通商問題等ヲ繞リ調整ヲ要スル點カ相當アリマスノテ、政府ハ目下之力爲努力中デアリマス。幸ニシテ昨年十月發生ノ基隆事件及永年ノ懸案タリシ永代借地權問題モ最近解決ヲ見、兩國間ノ空氣ハ次第ニ融和セラレツツアリマスカ、今回秩父

テルン」カ日本獨逸等ヲ公然目標ニ掲ケテ國際的ニ且極メテ巧妙ナル手段ニ依ル赤化工作ヲ實施シツツアルニ對シテハ、等シク國際的ニ防衛措置ヲ講スルノ必要ヲ認メ、我國ト立場ヲ同シクスル獨逸トノ間ニ過般「コミンテルン」ニ對スル共同防衛方ニ付、協定ヲ遂ケタ次第デアリマス。從テ本協定ハ現時我内外ノ情勢上極メテ適切ナル意義ヲ有スルモノデアリマシテ、政府ハ今後本協定ヲ充分活用シテ效果ヲ收メンコトヲ期シツツアリマスカ、本協定ノ運用ニ關シ、對内的ニハ諸君ノ御盡力ニ俟ツヘキ所尠クナイト考ヘマス。

次ニ、國際通商經濟カ何レノ國ニ取リテモ重要ナルコトハ申ス迄モナキ所デアリマス。人口夥多ニシテ資源ニ恵マレサル我國ノ如キ場合ニ於キマシテハ特ニ重要デアリマシテ、政府カ凡ユル機會ニ於テ天下ニ唱道シテ居リマスル國際通商自由ノ回復、乃至資源ノ開放等ハ我國生存權ノ主張ト見ルコトヲ得ルノデアリマシテ吾人ハ各國民ト共ニ世界ノ經濟的繁榮ニ協力シ、又各國民ト共ニ其ノ福利ヲ頒タンコトヲ衷心ヨリ冀望スルモノデアリマス。而シテ各國民ノ自由ナル通商經濟ノ發展ヲ確保スルコトカ、國際平和ヲ招來ス

御名代宮同妃殿下ノ御訪英ニ依リ日英親善ノ機運カ更ニ促進セラレツツアリマスコトハ御同慶ニ堪ヘマセン。

日米關係ハ概觀致シマシテ目下平穩テアルト申シテヨイト思ヒマス。但シ通商關係ニ於キマシテハ近年我海外貿易ノ進出ニ伴ヒ、紛糾續出シタノデアリマスカ、双方ノ立場ヲ互ニ了解スルニ隨テ漸次解決ノ機運ニ向ヒ、最近ニ於ケル米國綿業使節團ノ來朝ハ其ノ結果トシテ日米兩國當業者ニトツテ満足ナル協定ヲ成立セシムルニ至ツタノデアリマシテ、更ニ引續イテ目下行ハレツツアル經濟使節團ノ訪米ハ、此ノ機運ヲ一段ト助長スルモノト期待シテ居ル次第デアリマス。元來日米兩國ハ太平洋ヲ距テテ相隣シ、經濟的ニ見テハ相互依存ノ關係ニアルノデアリマスカラ、之ヲ基礎トシテ益々兩國ノ親善關係ヲ増進シ、太平洋ノ平和維持ニ眞摯ナル協力ヲ致シ度イト存シテ居リマス。

更ニ獨逸トノ關係ニ於キマシテハ、昨年十一月日獨防共協定ノ成立ヲ見マシタコトハ、御承知ノ通りデアリマス。由來帝國政府ハ共產主義運動ニ對シテハ、我國體ノ擁護及東亞恒久平和確保ノ見地ヨリ確固タル方針ヲ堅持シテ來タノデアリマスカ、第三「インターナショナル」即チ「コミン

ル最モ重要ナル條件テアルト信スルノデアリマス。

我國現時ノ貿易額ハ世界貿易總額ニ比スレハ金額ニ於テ尙僅ニ其ノ四「パーセント」弱ニ過キナイノデアリマスカ、夫レテモ最近逐年累増致シマシテ昨年ノ如キ實ニ五十五億圓ト云フ新記録ヲ示シ、更ニ本年上半期モ前年同期ニ比シ伸張ヲ豫想サレ得ルト云フ狀況ニアリマス。併シ乍ラ他方現在ノ國際狀勢ニ對應致シマシテ諸外國カ貿易ニ付各種ノ制限ヲ設ケ、特ニ本邦品ノ伸張力ニ對シ、警戒的態度ヲ保持シテ居リマスコトハ依然トシテ變化カナイノデアリマス。幸ヒ昨年中「フラン」平價切下ニ伴フ英米佛間貨幣協定、國際聯盟經濟財政委員會、汎米會議等ニ於キマシテ國際通商上ノ障礙除去ノ主張カ國際的ニ現レ、又本年三月開催サレマシタ國際聯盟原料問題委員會ニ於キマシテハ、前ニ述ヘマシタ我國ノ主張ニ贊意ヲ表スル國モ少クナイコトカ明瞭トナリマシタカ、此ノ主張ノ貫徹ニハ尙多大ノ困難カアリマスノテ、現實ニ我國ノ通商貿易ヲ維持増進セシムムカ爲ニハ、右主張ヲ堅持スル傍ラ諸外國ノ本邦品防遏措置ニ對シマシテ臨機適當ノ手段ヲ講セサルヲ得ヌノデアリマス。此ノ點ニ付キマシテハ我經濟力ノ發展ニ伴ヒマシテ、世界

尙又諸君ニ申上ケタイノハ、永代借地權ノ問題デアリマス。永代借地權問題ノ根本的解決ハ、外交上ノ久シイ懸案トシテ、從來帝國政府ト關係國政府トノ間ニ幾度カ折衝力重ネラレタ所デアリマス。既得ノ免稅特典拋棄ニ對スル補償問題ニ難點カアツテ、遂ニ今日ニ至ル迄妥結ヲ見得ナカッタ次第デアリマス。然ルニ其ノ解決力遷延スルニ伴ヒ、關係地方ノ財政、其ノ他一般納稅義務者等ニ對シ、種々ノ惡影響ヲ與フルニ至ツタノテ、政府ニ於テハ本問題ノ解決ヲ促進スルノ見地カラ、最近先ツ多年ノ懸案デアツタ永代借地權關係ノ滯納稅ニ對シ強制徵收ヲ行ヒ、之ヲ動因トシテ、關係國トノ間ニ銳意折衝ヲ重ネタ結果、今般漸ク其ノ努力カ酬ヒラレ、關係諸國トノ間ニ夫々締結サレルニ至ツタ同趣旨ノ取極ニ依リ、昭和十七年四月一日ヲ以テ、我國ニ於ケル永代借地制度ヲ一掃シ得ルコトナツタ次第デアリマス。本取極ノ内容ハ、既ニ關係地方廳ニ夫々通報濟ミノ通りテアリ、又之ニ關スル地方廳ノ措置振ニ付テハ曩ニ關係大臣ヨリ訓令カアツタ次第デアリマス。本取極ノ實施ニ付テハ其ノ條項及精神ニ遵由スル様、充分御留意ノ上、其ノ圓滿ナル運用ヲ期セラレンコトヲ望ムモノデアリマス。

ノ各地ニ於テ大小ノ案件續出シ、特ニ在外職員ハ之カ折衝ニ日モ足ラサル實狀デアリマス。現ニ我國ト英領印度、緬甸、蘭領印度、濠洲等トノ間ニ過去數ヶ月ノ日子ヲ費シマシテ通商交渉ヲ行ヒ、何レモ妥結ニ達シ、現在圓滿ナル通商貿易カ行ハレツアルコトハ各位ノ既ニ御了知ノ通りデアリマス。更ニ此ノ關係ヲ條約又ハ協定トスル爲、夫々目下交渉中デアリマシテ、尙此ノ外土耳其、伊太利、暹羅、中南米其ノ他ノ方面ニ於テ懸案中ノ通商交渉ハ少クナイノデアリマス。

右ノ如ク外務當局ト致シマシテハ通商貿易發展ノ爲諸方面ニ絶エス出來得ル限りノ努力ヲ傾ケツアル次第デアリマス。之カ爲ニハ過般支那ニ赴キマシタ經濟使節團及過日渡米シ更ニ英國等ニ赴クヘキ經濟使節團ノ如キ民間經濟團體ノ交換等民間側ノ協力ノ外、國內諸官憲間ノ協調協力ヲ要スルコト勿論デアリマス。即チ我國トシマシテハ國際經濟ノ一般狀況或ハ諸外國ノ個々ノ措置ニ對應セシムル様、我國ノ産業及貿易ヲ確立助成セネハナラヌノデアリマシテ、斯ノ如キ目的達成ノ爲ニハ舉國一致全力ヲ傾倒スル必要カアルノデアリマス。斯様ナ次第デアリマスカラ、現地ニ於

テ諸種ノ産業關係事項ヲ管掌セラレマスル地方長官各位ニ於カレマシテハ、充分現時ノ國際經濟狀況ト我國ノ立場ヲ念慮ニ置カレマシテ、此ノ上トモ私ノ只今述ヘマシタ精神ニ則ラレマシテ善處アラムコトヲ切望スルモノデアリマス。尙文化事業ナルモノハ本邦文化ノ精髓ヲ海外諸邦ニ紹介宣揚シ、本邦ニ對スル正シキ認識ヲ得セシムルコトヲ主タル目的トシテ居ルノデアリマシテ、來朝スル外國人ニ對シ本邦各地ニ於テ我文化ノ實相ヲ充分理解セシムルコトハ其ノ一方法デアリマス。就テハ此等外國ノ人士ニ對シ右目的ニ副フ様、便宜供與等然ルヘク御配慮ヲ希望致シマス。

茲ニ一言附ケ加ヘテ申上ケマス。政府ハ邦人ノ海外發展ハ我國運ノ伸張上最モ必要ノコトト認メマス。カ、渡航目的の國ノ國法ノ許ス範圍ニ於テ出來得ル限り國民ノ海外渡航ヲ許可スルノ方針ヲ採リツツアリマス。又本邦ニ渡來スル外國人ノ取扱ニ就キマシテハ、些細ナ事件デモ、之カ國際關係及外國ノ在留邦人ノ取扱ニ及ホス影響力尠クナイノハ御承知ノ通りデアリマデ、今後トモ單ニ外國人ナリトノ理由ニ依リ嚴ニ過クルコトナキ様、國法ノ許ス範圍ニ於テ各位ノ充分ナル御留意御協力ヲ切望スル次第デアリマス。

最後ニ事新シク申ス迄モナク、外交ノ背景ハ國論デアリマシテ國內輿論ノ鞏固ナル支持ヲ得テ初メテ外交政策ノ遂行ニ遺憾ナキヲ期シ得ルノデアリマス。而シテ健全ナル輿論ヲ作興スルニ當ツテハ、一般國民ヲシテ我國ヲ圍繞スル國際情勢ノ全貌ニ付、常ニ精確ナル知識ヲ涵養セシムルト共ニ、帝國外交ノ動向ニ關シ充分ナル理解ヲ有セシムルコトカ極メテ肝要デアリマシテ、國際知識ノ普及乃至外交輿論ノ啓發ニ就キマシテハ現ニ外務當局ニ於テモ能フ限り努力シテ居ルノデアリマス。日常直接國民ヲ指導スル立場ニ居ラレル諸君ニ於カレマシテモ、外務當局ト善ク御連絡ノ上此ノ上トモ一層御協力アラントヲ特ニ切望致ス次第デアリマス。

138

昭和12年5月14日

在中国日高臨時代理大使より  
佐藤外務大臣宛(電報)

日中国交改善に努力する決心を汪兆銘披露に  
ついて

南京 5月14日夜發  
本省 5月14日夜着

第三二二號(極秘)

本官十三日挨拶ヲ兼ネ汪兆銘ヲ往訪(清水及外交部董科長同席)會談セル處御參考トナルヘキ點左ノ通り

一、本官ヨリ日支ノ關係ニ付率直ニ言ヘハ以前ハ支那側ニ於テ日本カ何處迄押寄せ來ルヤヲ懸念シ居リタルカ最近ハ反對ニ日本側ニ於テ支那カ何處迄反撃シ來ルヤモ測リ難シトノ疑念ヲ抱クニ至リ其ノ調整ハ依然トシテ相當困難ナル様感セラルト述ヘタル處汪ハ自分モ率直ニ述フヘシトテ日支關係ヲ律スル原則ハ(一)兩國相協力シテ其ノ生存發展ヲ圖ルコト(二)一方ノ生存ノ爲ニ他ノ一方ヲ害セサルコトニアリト信シ居リ支那ノ對日方針モ之ヲ基礎トシテ考慮スレハ其ノ進退ニ自ラ限度アリト思惟スルモノナリ過般經濟視察團來訪ノ際支那側ヨリ經濟提携ニハ政治問題ノ解決ヲ前提トスヘシトノ意見ヲ發表シタル爲種々議論ヲ生シタル模様ナルカ茲ニ所謂政治問題ノ解決トハ總ユル問題ヲ一纏トシテ一舉ニ解決スヘシト言フニアラス實ハ極メテ小キ問題ヨリ一ツ宛解決シ行クコトヲ意味スルナリ之ヲ具體的ニ言ヘハ先ツ華北ノ問題ナルカ本問題ハ日本ニ取りテ死活ノ問題ニアラサルニ反シ支那ニ取り

ニ沿ヒテ進ムヘキモノト信ス(決シテ一時ノ客氣ニ驅ラレテ過大ナル要求ヲ持出スモノニアラサルヲ以テ此ノ點ハ特ニ了解セラレ度シト答ヘタリ)

二、次イテ本官ヨリ過般汪カ紀念週ニ於テ演說セル抗日論ヲ指摘シ右演說ハ詳シク其ノ内容ヲ玩味シ且汪從來ノ主張ヲ知悉シ居ル者ハ其ノ意ノ在ル所ヲ了解シ得ヘキモ一般殊ニ日本民衆ニハ文字通りニ解釋セラルル惧アリ支那國民ニ於テモ右ヲ以テ單ニ日本ニ反抗又ハ反撃スル意味ト解スル者アルヘク斯テハ却テ國民ノ感情ヲ刺戟スル結果トナルヲ惧ルルモノナルカ今日兩國ノ關係ヲ改善スルニハ先ツ國民ノ昂奮狀態ヲ緩和スルコト第一ノ條件ナルヘシト告ケタル處汪ハ同演說ハ決シテ日本ニ反抗スルコトヲ唱道シタルモノニアラス新聞ニ發表セラレタルモノハ演說ノ全部ヲ盡シ居ラサル爲或ハ誤解ヲ招ク所アリタルヤ測リ難キモ自分トシテハ寧ロ兩國ノ親善ヲ期スル考ニテ述ヘタル次第ニ自分ノ同志タル唐有壬ハ斃レ黃郛モ病歿シタルカ自分等ハ之ニ屈セス既定ノ方針ニ則リ益々兩國國交ノ改善ニ努力スル決心ナリト縷々陳辯スル所アリタリ

テハ眞ニ死活ノ問題ナレハ之ヲ解決セサレハ國民政府ハ國民ノ信望ヲ繋キ得ス從テ何人カ局ニ當ルモ其ノ抱懷スル政策ヲ實行シ難キ立場ニアリ(自分ハ塘沽協定成立ニ依リ華北問題解決ノ緒ニ就キタリト喜ヒ居タルニ一昨年六月ノ北支ノ狀態ニテハ如何トモスル能ハサルニ立至レリ)若シ之カ圓滿ニ解決セラルレハ茲ニ初メテ日支合作第一歩ノ基礎ヲ築クコトナリ其ノ余ノ問題モ比較的容易ニ解決シ得ル狀態ヲ招來スヘシ日本側ニ於テハ華北問題解決スレハ支那ハ直ニ滿洲國ノ問題ヲ持出スニアラスヤト懸念シ居ル模様ナルカ

自分ハ茲ニ華北問題解決スレハ滿洲問題ハ之ヲ拋棄スルモ可ナリトカ或ハ華北問題解決ノ上ハ更ニ進ンテ東四省ノ失地恢復ヲ圖ルヘシトカ明白ニ斷言スルコト能ハサルモ華北問題解決スレハ兩國國民ノ感情ハ相當ニ緩和セラレ從テ滿洲問題ノ如キハ比較的簡單容易ナル方法ニテ解決スルノ途開ケ來ルヘキコトハ明白ナリ

北平、在支各總領事へ轉電セリ

編注 「自分トシテハ寧ロ」より「自分等ハ之ニ」までの部分

は、五月十五日發訂正電報第三二三号によつて、「自分ハ寧ロ兩國ハ本來親善關係ニアルヘキモノニシテ現狀ハ變態ナリトノ考ニテ述ヘタル次第ニ自分ノ同志タル唐有壬ハ斃レ黃郛モ病歿シ張群亦職ヲ去ルノ破目ニ陥リタルカ自分等ハ之ニ」と訂正された。

139

昭和12年5月24日 在上海岡本(季正)總領事より 佐藤外務大臣宛(電報)

中国は国内統一や經濟建設に自信を深め日本との關係改善を焦る氣配が感じられないとの  
日高參事官の觀測について

上海 5月24日後發  
本省 5月24日夜着

第二八一號(極秘)

日高參事官ヨリ

本官着任以來挨拶旁各部長其ノ他要人ト接觸シ得タル印象

斷片的乍何等御參考迄不取敢

「最近支那大體統一セラレ漸次固マリ行クコトノ感ハ之ヲ好ムト好マサルトヲ問ハス一般ノ間ニ相當強ク之ニ伴ヒ經濟建設ニ對スル希望乃至熱意昂マリ來レル様認メラル蔣介石ハ建設事業ニ主力ヲ注クヘキコトヲ命シ居ル處(吳鼎昌、張公權ノ談)蔣ハ抗日ヲ標榜シテ自己ノ武力ヲ強化シ之ニ依リ略全國ノ軍事的統一ヲ見タリト信シ今後ハ其ノ餘力ヲ經濟建設ニ注ク(何應欽ハ今後ノ兵備ハ精銳主義ニ依リ冗員ノ裁撤ヲ行フ方針ナリト言ヘリ)斯クノ如ク民生運動及經濟建設ニ全國ノ餘力ヲ振向クルコトカ同時ニ軍事的ニモ蔣政權ノ安全ヲ保障スル手段トモナルモノナリト見ル向アリ(吳震脩)

斯クシテ鐵道並ニ公路ノ建設、農村及各種產業ノ振興等相當大袈裟ニ計畫セラレ居ル處實質的ニ見テ政府ノ事業タル公路及鐵道ハ兎モ角其ノ他ノ事業カ世間ノ嚮程迄行カス未タホンノ緒ニ就キタルニ過キサル程度ナルコトハ有識者ノ是認スル所ニシテ吳鼎昌ノ如キハ支那國民力早クモ現狀ニ得々トシテ上滑リタル氣持ニ陥ルコトナキカヲ懸念シ居ル程ナリ但シ宣傳其ノモノハ割引シテ考フル

兩國民ヲ利スルコト大ナル點ニ觸レ見タルモ素知ラヌ顔シテ話頭ヲ轉スル有様ナリ(龔飛鵬、張公權等)但シ兩國關係打開ノ爲ニハ必スシモ政治問題ノ先決ヲ要件トセス同時ニ個々ノ問題ヲ調整スルノ方法ニ依ルコト然ルヘシトノ意見ヲ述フル者アリ(王寵惠、張公權等)

唯北支問題ノ解決カ現在ノ行詰狀態ヲ打開スル爲絶對必要ナリトスル點ニ於テハ全ク一致シ居リ(「マクダニエル」及伊。書記官ノ言ニ依レハ支那當局者ハ(一)現狀以上ニ事態ヲ惡化セサルコト(二)滿洲問題ヲ提起スルノ意ナキコト及(三)北支殊ニ冀東密輸問題ノ解決カ日支國交調整ノ先決問題ナル旨内話セル趣ナリ)吳鼎昌ノ如キハ最率直ニ各般ノ問題ヲ論シタル末日支間ノ眞ノ親善關係ハ兩國カ一度衝突シタ上ナラテハ或ハ不可能ナルヤモ知レス從テ其ノ衝突ヲ出來得ル限り輕微且短期間トスルニ努ムルノ外ナキニアラサルカ等述ヘ居タリ

三、現在北支各機關ノ職ニアル支那人(就中陳覺生)ノ人物ニ關シ種々ノ非難ヲ爲シ彼等カ日支双方ノ間ニ巧言ヲ弄シテ立廻リ居ルハ國交調整上ヨリ見ルモ面白カラスト爲ス者多キコト注意ニ値スヘシ

モ斯ノ如キ全國的建設工作ノ意氣込ニ伴ヒ政府要路及關係者ノ間ニ一種ノ自信ヲ生セシメ轉シテ全般的ナル推進力トナリ居ルコトハ看過スヘカラス(吳震脩ノ如キ相當ノ自信ヲ以テ語り居タリ)

吳震脩、鄒琳等ノ談ニ依レハ幣制改革、鐵道經營ノ合理化、軍事費ノ減少等ニ依リ中央政府ノ信用昂マルト共ニ事業投資カ公債投資ニ比シ有利トナリ民間資本カ漸次事業投資ニ振向ケラレントスル傾向ヲ生シ來レルニ付今後差當リ實業ノ振興等ハ官商合辦ノ方法ニ依リ政府出資ハ銀行ヨリノ借入金ヲ以テ之ニ充ツルコトスルモ行ク行クハ此ノ分ヲ株式ノ形ニ改メ以テ純然タル民營ノ株式會社ノ發達ヲ促進シ度シトノコトナルカ結局ハ公債ノ消化力如何カ問題ナルヘク爾ク樂觀ヲ許スヤ否ヤハ疑問ノ餘地アルヘク又昨年ノ豐作カ萬事ニ好影響ヲ及ホシタルコトハ看過スヘカラス

四、支那側カ自國ノ實力ニ付一種ノ自信ヲ抱キ來リ他方日本ニ對スル國際環境及日本國內政情ノ觀測等ニ基因シ日本ヨリノ壓迫ヲ從來程感セサルニ至リシハ事實ナルカ如ク日支關係ノ打開ヲ焦ル氣配更ニナク試ニ日支飛行聯絡カ

支、北平へ轉電セリ

140 昭和12年5月29日 在中国日高臨時代理大使より 佐藤外務大臣宛(電報)

本邦人に対する中国官憲の態度が苛酷となり  
つつある風潮につき何応欽軍政部長へ是正方  
注意喚起について

南京 5月29日後発  
本省 5月29日後着

第三六五號

最近支那側ノ對日態度ニ付各方面ノ情勢ヲ綜合觀察スルニ本邦人關係ノ問題ニシテ支那側ヨリ見テ非合法ト看做スモノニ對シテハ其ノ既成事實タルト否トヲ問ハス遠慮ナク之ヲ摘發是正シ本邦人ニ付テハ益々監視ヲ嚴重ニシ苟モ其ノ非違ヲ看過セサル方針ヲ執ルニ至レル模様ニテ右ハ必然的ニ中央地方各官憲殊ニ警察、憲兵、軍隊等ノ態度ニ反映シ動モスレハ條約ノ規定及永年ノ慣行ヲ無視シテ迄モ日本人ノ權益ヲ壓迫スルコトヲ主權回復ナリト思込ミ甚タシキニ至リテハ故意ニ日本人ニ對スル取扱ヲ苛酷ニシテ得々タル

者出テ來ラントスルノ形勢ニアリ即チ最近ノ稅警團ノ朝鮮人ニ對スル暴行及汕頭警察ノ青山巡査毆打事件等モ其ノ現レノ一ト見ルヘク是等支那官憲ノ態度ヲ改善セシムルニアラサレハ今後續々此ノ種事件ノ發生ヲ見ル惧アリ此ノ點ニ付テハ我方ニ於テ不斷ニ中央地方當局ノ注意ヲ喚起スルコト必要ナリト存セラル依テ本官廿八日何應欽ト會見ノ上右兩事件ノ内容ヲ説明シ最近支那各地ノ官憲力往々ニシテ我居留民及旅行者ニ對シ亂暴ナル態度ニ出テ而カモ漸次其ノ兇暴ノ度ヲ加ヘツツアル實情ヲ指摘シタル上

若シ斯ル風潮ヲ放任シ置クトキハ遂ニハ由々シキ大事ヲモ惹起スル惧アリ中央ニ於テ充分指導乃至取締方考慮スルニアラサレハ國交調整ノ如キハ至空論トナルヘシト告ケタル處何ハ貴見ノ次第ハ至空論ニシテ自分ハ從來部下ニ對シ外國人ニ對スル應對ニハ充分注意スル樣訓戒シツツアル次第ナルカ何分國土廣大ニシテ教育普及セス智識淺薄ナル者多キ爲往々ニシテ不心得者ノ出ツルナキヤヲ保シ難ク一方政治上未タ完全統一シ居ラサル爲種々ノ黨派對立シ居リ我々カ進ンテ親日ノ徹底ヲ計ラントスレハ必ス漢奸賣國奴ノ惡名ヲ冠セラルル狀態ニテ之ニハ自分等モ弱リ居ル次第

第三二七號

「アーベンド」ハ三日本社ヨリ日本内閣更迭カ如何ニ支那ニ影響スヘキヤニ付至急航空便ニテ通信スヘキ旨命令アリタル由ニテ當方ノ意見ヲ求メタルニ付昨日來ノ支那新聞ニアル通り支那ハ近衛内閣ヲ歡迎シ居ル處此ノ際支那側ニ萬一日本ノ讓歩ヲ期待シ愈ツケ上ル空氣アリトセハ日支國交調整上遺憾千萬ニシテ此ノ點支那朝野ハ素ヨリ米國方面ニ於テモ正シキ認識ヲ得ル要アル旨話シタルカ「ア」モ汕頭事件、稅警團問題及東京天津快速飛行ニ對スル抗議等「ピンプリッキング」ナ態度ニ出テ居ルハ困リモノナル旨ヲ述ヘ居リタリ「ア」ノ通信入手ノ上ハ郵報スヘキモ不取敢「ア」ノ立場モアリ本件取扱御注意アリタシ

支ヘ轉電セリ

142

昭和12年6月4日

在上海岡本總領事より  
広田外務大臣宛(電報)

対中新認識に基づく協調政策への期待感など近  
衛新内閣成立に関する中国側世論動向について

ナリト述懐セルニ付本官ヨリ更ニ政府要路者ノ發奮ヲ促シ深キ認識ヲ有スル貴部長ノ如キハ萬難ヲ排シテ國交ノ障礙ヲ除去スル樣努力セラレ度シト述ヘ置キタリ

尙右會談ノ際何ハ稅警團問題ニ付

(一)日本側ニハ黃杰第二師長ノ正規兵カ團員ニ編入セラレ居レリトノ噂アル由ナルモ右ハ全然事實無根ニシテ自分ハ責任ヲ以テ之ヲ斷言スルコトヲ得

(二)朝鮮人ニ對スル掠奪暴行ノ件ハ軍政部ニ於テモ取調ヘタル處至ク事實ナキコト判明セリ

ト述ヘ居タリ御參考迄

北平、在支各總領事、汕頭ヘ轉電セリ

141

昭和12年6月3日

在上海岡本總領事より  
佐藤外務大臣宛(電報)

中国側が近衛新内閣に對中讓歩を期待する空氣があれば日中国交調整上遺憾に堪えない旨  
米國記者ヘ説明について

上海 6月3日後發  
本省 6月4日前着

第三三三號

往電第三二五號ニ關シ

支那側ノ意嚮ヲ内査スルニ近衛内閣ノ成立ハ國內的ニ見レハ軍部ノ退却、自由主義擡頭ノ現レニシテ支那ニ對シ協調主義ニ出テ兩國關係改善ノ爲ニハ或程度ノ讓歩ヲモ惜マサルヘシトテ早くモ日本ノ讓歩ニ依リ北支問題ノ解決ヲ期待シ有頂天トナリ居ル向アルモ一部ニ於テハ新内閣ノ政綱モ發表セラレサル上外相及内相等ノ顔觸モアリ假令首相ニ於テ對支新認識ニ基ク協調政策ヲ履行セントスルモ牽制ヲ受クルハ明白ニシテ殊ニ所謂對支三原則持出サルル懸念モアリ(三日南京ヨリ歸滬セル申報錢。萃ハハ谷ニ對シ南京政府筋ニ於テハ殊ニ此ノ點ヲ氣ニ病ミ居ル旨語レル由)近衛内閣ノ出現ヲ以テ遽ニ日支關係ノ好轉ヲ期待スルハ尙早ナリト爲ス者アリ他ノ一部ニテハ外相トシテモ支那ニ對スル認識ヲ新ニシ從來ノ遣方ニテハ到底行詰ヲ打開シ得サルコトヲ充分知リ居ルヘク旁近衛首相ノ下ニテハ三原則ノ如キヲ再ヒ持出スカ如キコトナカルヘシト言ヒツツ首相力能ク其

ノ抱懷スル對支方針ヲ具體的ニ實現スルコトヲ希望シ居ル者アリ目下ノ所氣迷氣分ナルカ日本商品ノ市況ハ下ケ止メヨリ寧ロ反撥氣配ナル由御參考迄  
支、北平、在支各總領事へ轉電セリ

143 昭和12年6月9日 在中国日高臨時代理大使より  
広田外務大臣宛(電報)

近衛内閣および広田外相に期待するとの中国  
要路の意見について

南京 6月9日後発  
本省 6月9日夜着

#### 第四〇三號

本官八日王寵惠ヲ往訪シ貴電第八九號ノ通り謝意ヲ傳達シタル處王ハ廣田大臣カ前總理ノ經歷アルニ拘ラス日支國交調整ノ熱意ヲ以テ近衛内閣ノ外務大臣ニ就任セルコトハ欣佩。ニ堪ヘス殊ニ自分ハ先年日本ニ立寄りタル際廣田外相ト親シク意見ノ交換ヲ爲シタルコトモアリ同氏ノ眞意ニ付テハ充分承知シ居ルニ付廣田大臣ノ就任ヲ欣ヒ居ル次第ナルカ支那側一般識者モ同大臣ニ期待スル所大ナリト述ヘ居タ

外務次官 堀内 謙介殿

關東軍ノ對支政策意見ニ關スル件(部外秘)

六月五日夜今村關東軍參謀副長本官々邸ニ來訪ノ上別紙寫通りノ對支政策ニ關スル關東軍意見ヲ内示シ右ハ今般政府ヨリ柴山大佐ヲ派遣シテ開示アリタル對支實行策及ヒ北支指導方策ニ關スル關東軍ノ意見ニシテ軍部中央ヘハ八日東上ノ筈ナル東條參謀長ヨリ具申スル筈ニ付キ本官ニ於テモ一讀アリ度キ旨希望ノ次第アリタリ本省ヘハ陸軍省若クハ參謀本部ヨリ内示アルヘキカト存スルモ爲念寫作成ノ上一部送附ス

本信寫宛先 在支大使(南京)、北平、天津、上海

(別紙)

對支政策ニ關スル意見具申

一帝國ノ對支政策ハ國策ノ重點タル滿洲國ノ健全ナル發達ヲ促進シ對蘇作戰準備ニ遺憾ナカラシムル見地ヨリ決定セラレサルヘカサルモノト確信ス最近ニ於ケル支那ノ狀態ヲ觀察スルニ西安事變ヲ楔機トシテ表面化セル國共ノ妥協ノ結果ハ共產黨ヲシテ赤化救國ヨリ國民黨ノ「ス

ルカ七日高宗武ハ本官ニ對シ近衛内閣成立ノ際自分(高)ハ逸早く蔣介石ニ之ヲ電話セル處蔣ハ同内閣ノ成立ハ大イニ感佩スル所ナリト漏ラシ居タル趣内話セリ  
北平、在支各總領事へ轉電セリ

144 昭和12年6月11日 在滿洲国沢田(廉三)大使館參事官より  
堀内(謙介)外務次官宛

「對支實行策」および「北支指導方策」に對  
する關東軍意見について

付記一 昭和十二年六月二日付

「對支實行策及北支指導方策ニ對スル關東軍ノ解釋」

二 昭和十二年六月十六日

「堀内次官及歐亞、東亞兩局長ト東條關東軍參謀長會談要領」

公機密第一〇三七號

(接受日不明)

昭和十二年六月十一日

在滿

大使館參事官 澤田 廉三

ローガン」タル抗日救國ニ轉向セシメ共產黨員ハ公然國民黨ト拘結シテ滿洲國及ヒ邊境地方ニ對シ反日滿工作ノ魔手ヲ伸フルニ至リ其ノ手段ハ日ヲ追フテ深刻且ツ巧妙トナリツツアリ而シテ現下ノ狀態ハ滿洲國ノ治安確保ノ見地ニ於テ軍トシテ之ヲ等閑視スルヲ得サル狀態ニアリ  
一、南京政權自体ハ如何ニ同政府ノ要人カ罪ヲ日本側ニ轉嫁シテ巧妙ナル宣傳ヲ行ヒ其ノ表面ヲ糊塗スト雖モ政權維持ノ基調ヲ抗日意識ノ高揚ニ置キアルコトハ周知ノ事實ナリ而シテ其ノ政權ノ基礎ヲ爲スモノハ歐米就中英國資本ト結ンテ我經濟的勢力ニ對抗セントスル浙江財閥ノ財力ト蔣介石ノ武力及ヒ抗日ヲ生命トスル國民黨ノ思想的背景ナルカ故ニ國共妥協ノ成立セル今日ニ於テハ其ノ抗日的風潮ハ將來益々熾烈トナルヘキハ何人ト雖モ否定シ能ハサル所ナルヘシ從テ若シ萬一南京政權カ從來ノ態度ヲ一擲シテ日本ト親善關係ニ入ルコトアリトセンカ即チ南京政權ノ基礎的商權ノ全面的崩壞ヲ來タシ同政權ノ自殺ヲ意味スルモノト言ハサルヘカラス從テ南京政權ヲ對照トスル國交調整ノ如キハ國際關係特ニ日本對英蘇間ノ關係ニ重大ナル變化ヲ生セサル限り絕對ニ不可能ナリト

判斷スルヲ至當トス

三、過般開示セラレタル對支實行策及ヒ北支指導策ハ從來ノ對策ニ比シテ著シク消極的ニシテ重點ヲ文化及ヒ經濟的工作ニ置キ政治的工作ヲ行ハサルコトニ定メラレ特ニ冀東政權ヲ冀察政權強化ノ目的ヲ以テ之トノ合流ヲ急キアルカ如キ傾向ナキニアラス之ヲ過去ノ實績ニ徴スルニ政治工作ノ伴ハサル經濟工作ノ進展力如何ニ實行困難ナルカハ單ニ事變前ノ滿洲ノ狀態ヲ想起スルモ明カナル所ナリ況ヤ成立以來裏面ニ於テ常ニ南京政權ノ指導ヲ仰キ表面親日ヲ標榜シテ事態ヲ糊塗シツツアル冀察政權ヲ強化センカ爲ニ冀東政權ヲ解消セントスルカ如キハ全ク南京政權ノ要求ヲ其ノ儘ニ甘受スルモノニシテ之カ爲滿洲國ノ治安及ヒ人心ニ及ホス影響ノ如何ニ大ナルモノアルヤハ思ヒ半ニ過クルモノアリ

況ヤ無智ノ支那民衆ニ對シ日本與シ易シトノ感ヲ與ヘ更ニ排日毎日ヲ助長スル結果ヲ招來スヘキハ青島還附後ノ日支關係ヲ想起セハ火ヲ見ルヨリモ明カナルモノアルニ於テヲヤ

四、一方文化經濟的工作ノ實質ヲ檢討スルニ刻下帝國ハ國防

内閣更迭ノ機ニ際シ過般開示セラレタル對支實行策及ヒ北支指導策ニ對シ更ニ一段ノ檢討ヲ加ヘラレンコトヲ望ム

(付記一)

昭和十二年六月二日

(六、七、森島參事官ヨリ接受)

對支實行策及北支指導方策ニ對スル關東軍ノ解釋

一、停戰協定ニ基ク戰區及之ニ關スル諸問題ノ處理ニ關シテハ昨午中央ノ命ニ依リ之ヲ支那駐屯軍ニ移管セルモ滿洲國ノ治安確保ノ見地ヨリ軍ハ重大ナル關心ヲ有ス

而テ停戰協定ニ關スル一切ノ件ハ今回ノ四省決定案ニ於テモ何等變化ナキモノト解釋ス

二、北支ノ經濟開發實行ノ爲ニハ直チニ之ニ要スル資金問題ヲ考慮セサルヘカラス、滿洲國開發ノタメニ巨額ノ資金ヲ要スル刻下ノ情勢ニ於テ更ニ北支ニ多額ノ投資ヲナスコトハ相當ノ困難ヲ伴フナランモ要ハ戰時ニ於ケル國防用資源ノ一部ヲ北支ニ求ムルヤ否ヤニ依リ決定セラルヘキモノナリ、仄聞スル所ニ依レハ最近國防用資源ハ先ツ

ノ充實ト滿洲國ノ開發ノ爲多額ノ資金ヲ必要トスル現況ニ於テ支那ニ對シ果シテ所要ノ資金ヲ投シ得ルヤ疑問トセサルヘカラス若シソレ日滿兩國内ノ資源ヲ以テ戰時ニ於ケル所要資源ヲ概ネ充足シ得ルモノトセハ我經濟力ニ餘力ヲ存セサル現在ニ於テ支那ニ對スル漫然タル投資ノ如キハ寧ロ有害無益ニシテ却テ日滿産業能力ノ擴張計畫ヲ阻害スルルヲ疑ナシトセス從テ本工作力豫期ノ如キ美點ヲ見ルヲ得ルヤ否ヤ疑問ナキ能ハス

三、現下支那ノ狀態ハ對蘇作戰準備完成ノ見地ヨリ觀察セハ我武力之ヲ許サハ先ツ之ニ一撃ヲ加ヘテ再ヒ立ツ能ハサラシメ我背後ノ此ノ脅威ヲ除去スルヲ以テ最モ有利ナル對策ナリト言ハサルヘカラス而シテ若シ我武力ニシテ之ヲ許サストセハ既成事實ヲ嚴守シテ支那ヲシテ一指ヲモ染メシメサル嚴然タル決意ノ下ニ我國防充實完了ノ時期迄靜觀的態度ヲ持スルヲ可トセン而シテ帝國ノ庶希スル國交調整ニ對シ毫モ之ニ應スル意思ナキ南京政權ニ對シ我ヨリ進ンテ親善ヲ求ムルカ如キハ其ノ民族性ニ鑑ミ却テ彼ノ排日毎日ノ態度ヲ增長セシメ毛ヲ吹イテ傷ヲ求ムルノ結果ヲ招來スルノ惧ナシトセス

滿洲(或ハ冀東地區ヲ含ム)ニ於テ略々充足シ得ヘシトノ見解ニ基キ計畫セラレアル由ナルカ此點研究ノ上方針ヲ確定シ明示セラレンコトヲ望ム蓋シ本件ハ滿洲開發ニ重大ナル關係アルノミナラス確固タル方針及計畫ニ基カサル慢然タル北支投資ハ滿洲ノ經濟開發ヲ阻害スル結果ヲ招來スル危險アレハナリ

從テ北支ノ經濟開發ハ國策ノ重點タル滿洲ノ開發ニ何等ノ支障ヲモ齎ササル範圍内ニ於テ實行セラルルモノト解釋ス

三、内蒙工作ニ對スル方針ハ從來ト何等ノ變化ナク若シ支那側カ實質的ニ察盟及錫盟ニ對シ觸手ヲ延ヘ來リタル際ハ土肥原—秦德純協定ニ違反スルモノトシテ斷乎タル處置ヲ講シ得ルモノト解釋ス

四、冀東自治政府ノ解消ハ冀察政權カ實質的ニ防共親日滿地帶トシテ我實力下ニ明朗化セラレタル曉ニ於テ始メテ實現セラルヘキモノニシテ現下ノ狀態ヲ以テ推移スル間ハ議論ノ餘地ナキモノト解釋ス

五、冀東貿易ノ解決ハ之ヲ償ヒ得テ餘アル條件ノ下ニ行ハルルモノト解釋ス

六自由飛行ノ中止ニ關シテハ軍ノ行フ自由飛行ハ之ヲ中止スルモ惠通公司ノ行フ自由飛行ハ之ヲ中止スル必要ナキモノト解釋ス

柴山大佐ノ談

(六、八)太田記

- (1) 明朗化サレタルヤ否ヤノ認定ハ勿論中央ニ於テナス。私見ニ依レハ津石龍烟カ目鼻着キタル上ハ冀察ハ一應明朗化サレタルモノト認メ差支ナカルヘシ
- (2) 六ノ點ハ「對支航空問題ノ解決促進ニ關スル方針」(五月七日)トハ關係ナシ(即チ日支及日滿獨航空聯絡ノ實現ヲ前提條件トセス)

(欄外記入)

關東軍ヨリ柴山大佐ニ手交セラレタルモノ (太田記)

(付記二)

堀内次官及歐亞、東亞兩局長ト東條關東軍參謀長會談要領

チタルカ如シ)從テ對支經濟工作ハ單ニ金儲ケヲ目的トスルモノハ之ヲ差控ヘルコトシ滿洲國ノ開發ニ支障ナキ範圍ニ止メラレ度キ希望ナリト述ヘタルニ付次官及歐亞局長ヨリ國防資源ト云フモ例ヘハ石油ノ如キハ石炭液化ニヨリ急ニ用途ヲ充タシ得サルヘク又戰時經濟總動員ヨリ云ヘハ綿羊毛ノ如キモノモ之ヲ必要トスルニ拘ラス之ヲ悉ク外國ニ仰カサルヘカラサルノミナラス國民ノ戰費負擔力ヲ涵養スル點ヨリ云ヘハ國際收支ノ適合上貿易ヲ増進スル必要アリ又諸外國トノ摩擦ヲ極力少ナカラシムル工作必要ナリト思考スル旨述ヘ置キタリ

- (3) 内蒙工作ニ關シテハ從來ノ方針ト何等變リナク察盟錫盟ニ對スル政治工作ヲナシ之ヲ固メルコトニ主力ヲ注ク考ヘナリト述ヘ當方ノ質問ニ對シ世間ニハ種々ノ風評アルモ綏遠ニ對スル軍事的行動等ハ絕對ニ行フコトナシト斷言シ此點ハ陸軍次官ヨリモ質問アリタルニ付同様答ヘ置キタル次第ナリト附言セリ
- (4) 冀東政府ノ解消ハ冀察政權ノ態度明確トナラサル限り之ヲ實現シ難シト考フト述ヘタルニ付次官ヨリソノ點

六月十六日午前外務次官官邸ニ於テ堀内次官東郷歐亞局長及石射東亞局長東條關東軍參謀長ト約五十分ニ亘リ會談セルカ其ノ要領左ノ通

- 「次官ヨリ短時間ノコトナレハ先ツ關東軍ノ對支及對「ソ」關係ニ對スル考ヲ述ヘラレ度シト求メタルニ對シ參謀長ハ先ツ對支政策ニ付テハ先般四省間ニ於テ決定セラレタルモノヲ關東軍ニモ回示セラレタルカ右ハ既ニ中央ニ於テ決定セラレタルモノナルニ付關東軍トシテモ之ヲ遵奉スヘシ但シ右方策ノ内二三ノ點ニ付關東軍ノ解釋ヲ森島參事官ニ述ヘ置キタルヲ以テ同參事官ヨリ御承知ノコトト思フモ簡單ニ申上クレハ
- (1) 停戰協定ニ關スル事項ハ今回ノ四省決定方策ニヨリ何等變更ナキモノト解釋ス右ハ森島參事官ニ於テモ之ヲ肯定セラレタルカ其ノ通ニ承知シテ可然ヤト問ヒタルニ付次官ヨリ然リト答ヘ置キタリ
- (2) 對支經濟工作ニ關シ最近關東軍ニ於テ調査ノ結果國防資源ハ滿洲國及冀東地域内ニ於テ略々之ヲ充足シ得ル見込立チタリ(例ヘハ鐵礦ノ如キ弓張嶺ノ富鐵約五千萬屯、臨江ノ鐵礦等發見セラレ又石炭液化ノ見込モ立

ハ此際直チニ冀東政府ヲ解消シ得ルモノトハ考ヘ居ラス只同政府ノ内政ヲ改善スル爲ニ有力ナル顧問ヲ入レ其ノ他必要ナル改革ヲナスコトノ急務ナルヲ認ムト述ヘタル處參謀長ハ其レハ別問題ナルカ關東軍トシテモ同様其ノ必要ヲ痛感シ居レリト答ヘタリ

- (5) 冀東貿易ノ解決ハ別ニ關東軍トシテ反對ナキモノ之ヲ稅率引下、冀東ノ收入援助ノ如キ何等カ對償ヲ得ル等外交上有利ニ利用セラレ度シト述ヘ尙此點ニ關シ世上往々特殊貿易ト密輸トヲ混淆スルモノアルモ冀東特殊貿易ハ地方政權ノ公然行フモノニシテ密輸トハ截然區別スルヲ要ス密輸ノ方ハ外交上取締ル様セラレ度シト附言セリ

ニ參謀長ハ滿「ソ」國境ニ付テハ出先各部隊ニ此ノ際事ヲ起スコトナキ様ヨク云ヒ含メ居レリ前線ニアル二三下級將校ニ於テ敵狀偵察ノ爲事端ヲ起シタルコトアルモソレ等ハ戒諭ヲ加ヘ置キタリ此際對「ソ」關係ニ事ヲ起スコトナキニ付安心アリ度シト述ヘタルニ付歐亞局長ヨリ國境委員會ノ問題ニ付テハ山岡參謀ノ説明ハ諒トセルモ内外交大局の見地ヨリ中央ニ於テ協議決定セル次第ナルニ付

右了承アリタシト述ヘタル處參謀長ハ右ハ之ヲ了トスルモ此ノ際「ソ」側ノ機嫌ヲトルカ如キコトハ避ケラレ度シト述ヘタリ仍テ歐亞局長ヨリ外務省トシテハ「ソ」ヲ恐レス從テ機嫌ヲトル必要ヲ認メサルカ徒ニ感情ニ捉ハレシ且大局の見地ニ立ツコト必要ニテ兩國間ニ正常關係ヲ維持シ且出來得ル限リ諸問題ノ解決ヲ計ラントノ考ナリト説明セリ

三、尙歐亞局長ヨリ此機會ニ於テ日英關係調整問題ニ付説明シ度キ處右ハ永イ間ノ問題ニテ自分ヨリモ豫テ永田、磯谷兩軍務局長及板垣參謀長ニモ話ヲシ其ノ了解ヲ得居リ又昨年陸海外三省幹部會議ニ於テ協議ノ結果日獨ト同時ニ日英接近工作ヲ行フコトニ決定セルモノニシテ先ツ日獨協定カ成立セル次第ナリ此際日英關係ヲ調整スルコトハ日本ニトリ極メテ必要ナルノミナラス獨逸側モ英トノ關係ノ調整ヲ希望シ居レリト説明セル處參謀長ハ日獨協定ニ付テハ政府内ニ於テ多少之ニ對スル熱意ヲ失ヘルヤノ感想ヲ抱クモノアリト云ヘルニ付歐亞局長ヨリソノ點ニ付テハ林内閣時代ニモ外相ノ議會演說中ニ特ニ廣田内閣ノ日獨協定締結ヲ極メテ機宜ニ適セル措置ナリトシソ

バ棉花ヲ北支ヨリ輸入スルコトハ勿論差支ナキモ龍烟鐵礦ノ開發等ハ滿洲ニ於ケル同種計畫ト睨ミ合セテ實施シテ實ニ度トノ意ナルヘキ處右ハ外務省トシテモ關東軍北支駐屯軍間ニ明確ニ話ヲ付ケテ實ハネバ迷惑也

145

昭和12年6月23日

在中国加藤大使館一等書記官より  
広田外務大臣宛(電報)

帰任する川越大使との国交調整交渉は成果が  
期待できない旨の中国紙報道振りについて

北平 6月23日後発  
本省 6月23日夜着

第三一二號

二十二日北平「ニュース」ノ「日支交渉」ト題スル論說要旨左ノ通り

川越大使ハ南京歸任後政情視察並ニ天津及關東兩軍司令官ト意見交換ノ爲北上スル趣ノ處吾人ハ同大使カ如何ナル新訓令ヲ携行スルヤ興味ヲ以テ之ヲ待ツモノナリ尤モ日本側ハ今猶廣田三原則ヲ以テ日支交渉ノ基調ト爲シ居ル由ナレハ餘リ大ナル期待ハ持チ得サルヘシ更ニ日本側ハ政治問題

ノ實效ヲ收メルコトニ努力スル旨ヲ言明シ更ニ議會ニ於ケル質問應答ニ於テモ屢々コノ點ヲ明瞭ニシタルノミナラス地方長官會議ニ於ケル佐藤外相ノ演說中ニモ特ニ繰リ返ヘシ居ル通ナリト述ヘ更ニ次官ヨリ日獨協定ハ公表セラレタル部分ノミニテハ其ノ重要性ヲ國民一般ニ理解セシムルコト相當ニ困難アルモ政府部内ニ於テハ同協定ヲ以テ重要ナル國策ト認ムルコトニ何等變リナシト述ヘ尙歐亞局長ヨリ對英工作ニ於テハ何等日獨協定ニ影響ヲ及ホスコトナキノミナラス日英關係ノ調節ハ日獨協定ヲ強化シ又之ヲ充分ニ活カス結果トナルモノニシテ幸ヒ日英關係調整ニ至ラハ對「ソ」關係ニ於テモ我カ日本ノ立場ヲ勘テ有利ナラシムヘキ旨ヲ説明シタル處參謀長モ對英工作ハ對支對「ソ」關係ヨリ見ルモ甚タ必要ナルモノト自分モ考フル旨述ヘタリ

(欄外記入)

具體的ニ如何ナルコトヲ意味スルヤ明カナラズ恐ラク物資ノ北支ヨリノ輸入ヲ指スニ非スシテ北支開發ニ資金ヲ要スルノ理由ヲ以テ對滿投資金ヲ牽制スベカラズトノ趣旨ト解セラル換言セ

ニ觸ルルコトナク經濟提携ヲ主張シ先ツ某重要交通路ノ交渉ヨリ始メントシ密輸ニ關シテハ支那側ノ關稅引下ヲ先決問題トスル態度ヲ固執セントスルモノナル由ノ處右カ眞ニ近衛内閣ノ對支政策ナリトセハ兩國ノ意見合致ハ殆ト望ナカルヘシ即チ過日ノ日本記者トノ會見ニ於テ王外交部長ハ密輸カ關稅引下ノ道具ニ供セラルルコトヲ斷シテ許サス兩者ハ全然別個ノ問題ニシテ支那ハ其ノ主權ニ基キ適當ニ稅率ヲ定ムル權利ヲ有スト述ヘ居リ密輸及關稅引下ハ何レモ支那ニ損失ヲ與フルモノナレハ支那側ヨリ讓歩スヘキ何等ノ理由ナキノナリ

然レトモ右ハ必スシモ日支關係積極的惡因ヲ意味セス川越大使ノ持參スル訓令ハ恐ラク現狀維持ヲ目的トスルモノナルヘク其ノ結果支那側ハ讓歩ヲ肯セス日本側ハ從來ノ行爲ヲ責メントセス相互ニ不安定ノ狀態ヲ當分持續スルコトトナルヘシ

支、上海、天津へ轉電セリ

146

昭和12年6月28日

在中国日高臨時代理大使より  
広田外務大臣宛(電報)

川越大使の新聞談話を批判する中国紙報道振り  
および右報道の背後関係に関する観測について

付記 昭和十二年六月二十七日着在上海岡本総領事

より広田外務大臣宛電報特情上海第四〇号

中国紙掲載の川越大使新聞談話

南京 6月28日後発  
本省 6月28日夜着

第四五八號

川越大使が出発前新聞記者ニ對シテ爲セル談話ハ東京中央社電トシテ二十六日當地各新聞ニ大見出ニテ掲載セラレ一般ノ注目ヲ惹キタルカ右ニ關聯シ二十七日中央通訊社ハ「川越ノ談話ハ人ヲシテ失望セシメ中日關係ノ前途暗澹タリ」トノ見出ヲ附シ大使ノ談話ノ内容ニ付各項目毎ニ批評ヲ加ヘ日本ノ生存ト發展ノ權利ハ他國ノ生存ト發展ヲ妨害セサルヲ限度トスヘキコト、滿洲國ト北支トヲ關聯セシメ論シ居ルコトハ日本ノ北支ニ對スル企圖ニ無限ノ疑惑ヲ拘カシムルモノナルコト、中日經濟合作問題ヲ中央、地方各別ニ交渉セントスルハ文化政策ノ現レナルコト、塘沽協定<sup>塘沽</sup>ハ一時的ノモノニシテ情勢ノ變化ニ伴ヒ當然之ヲ廢棄スヘ

北平、在支各總領事へ轉電セリ

(付記)

上海 發

本省 6月27日後着

特情 上海第四〇號

支那側カ反駁ノ基礎トシテ使用シタ所謂二十五日ノ中央社東京電「川越大使談話」ハ左ノ通り

余ハ曩ニ吾人ハ支那ニ對シ再認識スヘキアルト言ツタカ此ノ言葉ハ測ラスモ各種ノ誤解ヲ招イタ様々自分ノ言フ所ハ増強ト發展途上ノ國家ニ對シ時々認識ヲ新ニシ之ニ對シ錯誤ノ危險ニ陥ルコトナカラシメン意テアル日本ハ既ニ支那ニ對シ再認識シタカ余ハ正ニ支那カ日本ヲ再認識センコトヲ要求スルモノヲ日本ヲ認識スルトハ即チ日本ノ生存ト發展ノ權利及滿洲國ノ生存ト北支ノ間ノ必然的連繫ヲ認識スルコトヲ北支コソ滿洲國ノ生存ト發展ノ必然的運命テアリ存在テアル經濟合作問題ニ付テハ國民政府ハ北支、日本間ノ地方的合作ヲ承認セス日本カ中央ト合作センコトヲ要求シテ居ル様タカ右ハ全ク問題ノ性質如何ニ依ツテ決定サ

キモノナルコト及北支駐屯軍ハ條約ノ根據アルモ其ノ意義ト範圍ニハ自ラ制限アリ日本現在ノ軍隊ノ數ハ遙ニ右ノ範圍ヲ超エ支那ノ人民ニ重大ナル刺戟ヲ與フルモノナルコトヲ指摘シタル上

一般ニ近衛新內閣成立シ川越大使歸任ニ當リ從來ト異レル新シキ政策ヲ携ヘ來ルモノト期待シ居リタルカ川越大使ノ談話ニ依レハ却テ日支關係ノ前途ヲ暗澹<sup>暗澹</sup>タラシムルモノニシテ極メテ遺憾ナリ唯毒品ノ取締ヲ嚴格ニスヘシトノ聲明ノミハ人意ヲ強ウスルニ足ルトノ通信ヲ發シ之亦大見出ヲ以テ各新聞ニ掲載セラレタルカ本官二十六日徐謨ト會談(別ニ電報ス)ノ際得タル印象並ニ各方面ノ情報ヲ綜合スルニ右ハ政府筋ニテ起案シタルモノヲ態ト一般ノ觀測ノ如キ體裁ニテ發表セシメタルモノノ如ク同日ノ中央日報及二十八日ノ新京日報、新民報ハ更ニ社説ヲ以テ前記ノ筋ヲ敷衍説明シタル上廣田外相ノ對支政策ハ三原則ニ拘泥セスト言フハ表面ノミニテ實ハ以前ト異ナル所ナシト斷シ廣田外相及川越大使カ對支政策ニ再檢討ヲ加フルニアラサレハ日支關係好轉ノ機會ナキノミナラス太平洋ヲ繞ル各國間ノ險惡化ハ解消ノ望ナシト論シ居レリ

ルヘキモノタ凡ソ中央ニ屬スルモノハ中央ト合作シ地方ニ屬スルモノハ地方ト合作シ其ノ實現ヲ圖ルヘキタ北支駐屯軍ハ條約ノ規定ニ依ルモノテ當然廢除スヘキテナイ塘沽、梅津・何應欽兩協定亦然リ貿易、航空及關稅制度ノ調整ハ何レモ必要タ北支ニ於ケル日本飛行機ノ航空ハ既ニ實現ヲ見テ居リ之ニ對シ國民政府カ爭辯スル理由ハナイ日支交渉ハ支那側ヨリ要求カアレハ隨時舉行スル併シ吾人ハ近キ將來ニ於テ一切ヲ解決出來ルトハ豫測セヌ寧ロ少シツツ好轉セシムルヲ得策トスル

147 昭和12年6月30日

在上海岡本總領事より  
広田外務大臣宛(電報)

日中間の交渉案件はすべて國民政府中央との  
間で解決すべき旨徐謨外交部政務次長が日高  
參事官に意見開陳について

上海 6月30日後發  
本省 6月30日夜着

第四四〇號

日高參事官ヨリ

本官二十六日徐謨ヲ往訪日支問題ニ付忌憚ナキ意見ノ交換ヲ爲シタル要領御參考迄左ノ通り

一、本官ヨリ最近日本ニハ所謂對支再認識論擡頭シ支那ノ現狀ヲ理解セント努力スル傾向アル一方今回親シク南京ニ來リ之ヲ往年ニ比較シテ觀察スルニ國內ノ建設ニハ素ヨリ進歩セル部門アリ然レトモ之ト同時ニ抗日意識ハ却テ一般ニ浸潤シツツアル狀況ニテ其ノ對日關係ノ惡化ニハ失望セサルヲ得スト告ケタル處徐ハ支那ノ統一並ニ建設ハ其ノ程度猶極メテ幼稚ニシテ政府當局ハ素ヨリ一般識者ニ於テモ今後益々努力セサルヘカラサルコトヲ覺悟シ決シテ日本側ニテ考ヘラルル如ク思ヒ上リテ日本ニ衝突クカ如キ態度ヲ執ルモノニアラス又國防充實ニ付テハ相當努力シ居ルモ日本ノミ目標ト爲シ居ルモノニアラス國家自立ノ爲當然ノ施設ヲ爲サント努力シ居ルニ過キスト述ヘタリ

二、次テ談日支國交調整問題ニ入ルヤ徐ハ日本ノ對支政策ノ根本原則ハ内閣ノ更迭等ニ依リ容易ニ改變シ得ヘシトハ期待シ居ラサルモ切メテ其ノ方法丈ケニテモ變更セラルレハ國交ノ改善ニ裨益スル所少カラサルヘシ例ヘハ日支

ハ恐ラク北支問題ヲ中央ト話合ヘハ支那ハ益々付ケ上リ滿洲問題迄持出スヘシトノ疑念ヲ抱キ居ルモノナルヘシ然レトモ之ハ杞憂ニ過キス支那ハ自ラ止マル所ヲ知り居レリ他方今日ノ如ク日本カ武力ヲ以テ北支ヲ壓迫シ次テ經濟提携ヲ以テ之ニ迫ルコトハ支那分裂政策ヲ執リ居ルモノト言ハルルモ辯解ノ辭ナカルヘク支那官民トシテハ危惧ノ念ニ驅ラレ提携ノ手ヲ延ハス氣ニナラス日支ノ國交ハ先ツ此ノ點ヨリ是正セサルヘカラス元來支那ハ被害者ノ立場ニアルヲ以テ先ツ日本側ヨリ現状改善ノ一步ヲ踏出ス必要アリ

例ヘハ密輸問題ノ如キモ日本側ニテ之ヲ制止セントセハ直ニ實行シ得ヘキ問題ニシテ之ヲ一般關稅ノ引下問題ニ引掛ケ來レハ支那トシテハ容認シ難シト言フノ外ナキモ若シ日本ニシテ自發的ニ之ヲ實行セハ支那トシテモ自主的ニ關稅ノ改訂ヲ考慮スルノ空氣トナルヘシ右ハ結局相互信賴ノ念ヲ基礎トスルモノニシテ冀東問題ノ如キモ日本トシテハ支那分裂政策ヲ世界ニ表現スル以外何等益スル所ナカルヘシ若シ之ヲ自發的ニ取消サハ之丈ケニテモ兩國間ノ空氣ハ著シク好轉スヘシト述ヘタルヲ以テ本官

問題ハ總テ中央政府トノ話合ニ依リ解決スル方法ニ改メラルルカ如キハ第一ノ要點ナリ新聞報道ニ依レハ川越大使ハ東京ニ於テ出發前北支ノ經濟提携問題ハ地方當局ト交渉スヘシト語ラレタル趣ナルカ右ハ支那側トシテ贊成シ難キハ勿論實際上假令一時成功スルモ到底永續性ナカルヘシ若シ直接中央ト話合フトセハ中ニハ出來サル問題モアルヘキモ一旦出來上リタル後ハ必ス永續スヘク日本ハ此ノ點深甚ノ考慮ヲ要スト述ヘタルニ依リ本官ヨリ川越大使ノ語ル所ハ必スシモ總テ地方當局相手ニ交渉スヘシト言フニアラスシテ問題ノ性質ニ依リテハ地方的ニ話合フコト却テ實際的ナル場合アリトノ意ナルヘシ大體問題ヲ地方的ニ解決スヘキヤ將又中央ト話合フヘキヤハ大シタ問題ニアラス

必要アラハ支那内部ニ於テ中央地方ノ打合ヲ爲セハ足ル次第二テ斯卡ルコトニ拘泥スルコト自體既ニ面白カラスト告ケタル處徐ハ英國ノ如キハ地方當局ト話ノ切懸ヲ作リタル場合ニモ最後ニハ必ス中央トノ話合ニテ之ヲ纏ムル方針ヲ執リ居レリト説明シ斯ノ如キ中央政府同志ニテ總テ話合フニハ相互信賴ノ念ヲ要スル次第ナルカ日本

ヨリ兩國間ニ先ツ信賴ノ念ヲ必要トスルコトハ同感ナルカ夫レニハ相互ニ「話セハ判ル」ト言フ安心ヲ得ルコト必要ナリ若シ支那側ニ於テ北支ノ問題ニノミ膠着シ此ノ問題片付カサレハ萬事ノ話合ハ出來ストノ一點張りニテ進ム以上兩國全体ノ問題ハ一モ動カサルニ至ルヘシ支那ハ先ツ宜シク我々ヲシテ信賴セシムルニ足ル「ゼスチュア」ヲ示スヘシトテ其ノ一例トシテ成都總領事館再開問題(支發往電第四〇八號)ヲ論シタリ

三、本官ヨリ昨年ノ日支交渉ノ當時双方ノ間ニハ略々話合纏マリタル問題モアリ更ニ話合ヲ進ムヘキ問題モアリ是等個々ノ問題ヲ取上ケテ引續キ話合ヲ進ムルコトハ兩國國交打開ノ爲有効ナルヘシト探リヲ入レタル處徐ハ昨年ノ交渉ニ於テ成都事件ニ關係ナキ種々ノ問題ヲ持出シタルコトハ極メテ拙劣ナル遣方ニテ支那トシテハ一驚ヲ喫シタル次第ニテ之ニ對抗スル爲五項目ノ要求ヲ出シタル次第ナリト答ヘタルニ付然ラハ當初ヨリ日本側ノ要求ヲ容ルル氣持ナカリシ譯ナルヘシト反問セルニ徐ハ笑ヒ乍ラ之ヲ否定セス尙本官ヨリ航空聯絡等ノ問題ニモ觸レ水ヲ向ケタルモ容易ニ取合ハス同交渉各項目ノ話合ヲ繼續ス

ルカ如キハ全ク豫想シ居ラサルモノノ如ク見受ケラレタリ

最後ニ本官ヨリ最近支那新聞ニ察北ニ於テ日本カ何カ策動シツツアルカノ如キ書振ニテ挑發的ノ記事ヲ掲ケ居ルハ徒ニ國民ノ感情ヲ刺戟スルモノニシテ面白カラス政府當局ハ先ツカル點ヨリ取締ヲ勵行スル必要アル旨力説シ置ケリ

支、在支各總領事へ轉電セリ

天津ヨリ北平へ轉報アリタシ

148 昭和12年7月1日 在上海岡本總領事より  
広田外務大臣宛(電報)

川越大使より中国紙掲載の新聞談話は自分の意見を正しく伝えていない旨帰国中の許大使へ説明について

上海 7月1日後発  
本省 7月1日夜着

第四四七號

川越大使ヨリ

分慎重ニ考慮シテ取扱ハルルコト然ルヘシト述ヘタリ  
尙許ハ七月十日頃歸任ノ豫定ナリシカ健康未タ恢復セサル爲出發期日確定シ居ラストノコトナリ  
在支各總領事へ轉電シ支へ轉報セリ  
天津ヨリ北平へ轉報アリタシ

149 昭和12年7月1日 在上海岡本總領事より  
広田外務大臣宛(電報)

中国政府の対日外交は沈滞状態にあり蒋介石は日本を刺激せず国内統一事業に専念する意向であるとの情報について

上海 7月1日後発  
本省 7月1日夜着

第四四六號

川越大使ヨリ

三十日張熾章カ本使ニ内話スル所御參考迄左ノ通り  
一、國民政府ノ對日外交ノ方針及態度ハ大使歸國當時ニ比シ何等ノ變化モ進展モナク極メテ沈滞セル状態ニアリ蒋介石ノ眞意ヲ察スルニ此ノ際成ルヘク支那側ヨリ日本ヲ刺

三十日許大使挨拶ノ爲本使ヲ來訪ノ際中央社東京電ヲ以テ報セラレタル本使出發前ノ談話ノ内容ニ付質問ヲ爲シタルニ付本使ヨリ右ハ陳博生ニ直接語レルモノノ外各新聞等ニ現レタル記事ヲ織リ交セ報道シ居ルモノノ如ク必スシモ當時ノ談話ト一致セス從テ本使ノ意見ヲ完全ニ發表シ居ルモノニアラサルコトハ言フ迄モナシ自分ノ言ハント欲スル所ハ要スルニ兩國ノ全般的國交調整ハ兩國國內ノ情勢ニ照ラシ今直ニ實現スルコト困難ナリト思惟スルモノナルカ兩國政治家ノ努力ニ依リ其ノ時期ノ速ニ來ランコトヲ衷心願望スルモノナリト言フニアリト説明シタル處許ハ更ニ今回閣下ノ歸任ニ當リ航空聯絡、密輸取締及關稅引下等ノ問題ニ付我方ト商議ヲ開始セラルル腹案ヲ作ラレタル様報道セラレ居ル處事實ナリヤト問ヒタルニ依リ本使ヨリ政治問題ト關係薄ク事務的ニ處理シ得ラルル問題ハ素ヨリ隨時彼我ノ間ニ話合ヲ遂ケ差支ナキモノト思惟スト然ルヘク應酬シ置キタリ尙最後ニ許ハ全然個人的ノ御話ナルカト前提シテ北支ノ問題ニ關シテハ支那側一般ニ神經ヲ尖ラシ居リ北支經濟問題ニ付日本カ地方當局相手ニ交渉ヲ進ムヘシトノ意見ニ對シテハ官民各方面ニ相當議論アル模様ニテ此ノ點ハ充

載スルカ如キ行動ニ出テサル様慎ミ専ラ國內ノ經濟建設、教育ノ刷新並ニ思想ノ統一ニ努メ以テ國家ノ統一ヲ計ラント企圖シ居ルモノノ如ク今夏廬山ニ於ケル談話會モ其ノ工作ノ一部ト察セラル

ニ政府ハ目下四川方面ノ軍事整理ノ爲努力シツツアル模様ナルカ何レ解決ヲ見ルコトトナルヘク東北軍ハ豫定ノ通り配置ヲ終リ今後ハ専ラ訓練ノ遣直シヲ行フ豫定ニテ軍事上ノ統一モ着々進行セラルヘシ唯廣西ノミハ中央トノ關係依然面白カラス尙同省ノ財政ハ相當困窮シ居ル模様ニテ目下宋子文ニ於テ救済方法種々考究シ居ル趣ナリ

ニ北支ノ經濟開發問題ニ關シ支那側カ津石鐵道ノ敷設ニ反對スルハ傳ヘラルル如ク國防上ノ原因ニ依ルニアラスシテ鐵道部ヲ除外シテ支那鐵道全般ノ計畫ニ齟齬ヲ來シ其ノ統制ヲ紊ルコトヲ排撃スルモノナリ又龍烟鐵礦開發ニ付テハ過日政府ヨリ宋哲元ニ對シ鑛業法ノ定ムル規定ニ從ヒ且中央ノ許可ヲ得タル上ナラハ之ヲ實行スルモ差支ナキ旨申送レル趣ナリ

在支各總領事へ轉電シ支へ轉報セリ  
天津ヨリ北平へ轉報アリタシ